

# 第七章

## 神社・仏閣の記



# 第一節 鴨島の神社

## 1、昔の社寺の伝言

正月元旦、僕は父につれられて八幡神社に参拝した。拝殿の前の桜と橘が春の訪れを待っている。参拝がすすむと、父は僕に八幡様の由来を話された。

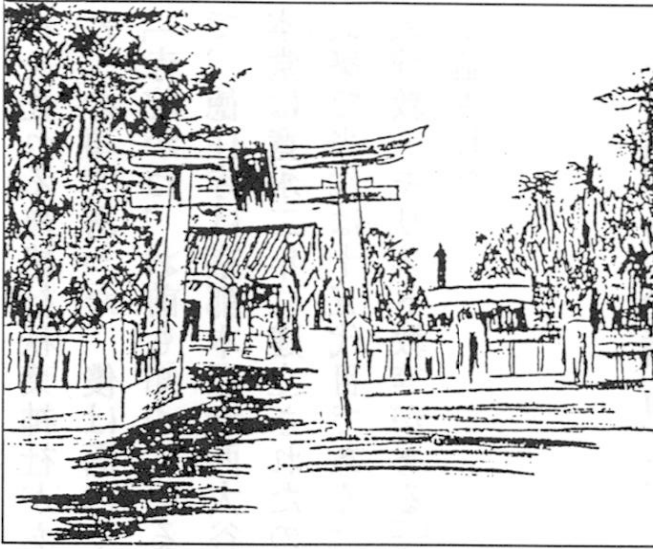
「この社は氏神ほんだ誉田別命わけのなをと鴨島城主鴨島六之進を祀ったもので、社殿は元禄年間の建築にかかり、毎年

春と秋に大祭が行われる」

と話された。さらに社殿の右へまわって忠魂碑を拝し、拝殿の後にある何百年も経たであろうと思われる大榎を見上げつつ北の門へ出た。

帰る途中、父は更に本町の社寺について次のように話された。

「お前も知っている通り、この南には若宮八幡宮がある。あそこには、大鷦鷯命おおささぎのみことと菅原道真すがわらのみちざねをお祀り申してある。大鷦鷯命さまは仁徳天皇の事だよ。それから喜来の杉尾神社には大巳貴命おおなむちのみことを祀つてある。この方は白うさぎの所で習った大国主命おおくにのみことのことだよ。又若宮様には大雀神おおさぎと大山神をお祀り申してある。何れも村社で町から奉幣使を差し立てることになっている。尚、この外に可遇土かぐつち



八幡神社

命を祀れる無格社秋葉神社があつて、夏の夜市がにぎわしい。」

と、の事であつた。僕は面白くなつて、更に本町の寺院について聞くと、父は、

「寺院かね、お前も知っている通り、鴨島の常教寺と喜来の徳住寺の二つがあつて、何れも真宗のお寺で、徳住寺は京都本願寺西大谷派に属し、乗島入道来心の父が当寺を開いて来心の霊を祀つたものだ。

本堂は寛永二年に建立されたのだそうだ。また、常教寺は京都興正寺派に属し、本堂は明治二十二年の改築で当代は十五代目である。本町はおおむね真宗であるが、外に日蓮宗・真言宗・黒住教・金光教・天理教・キリスト教等がある。」

と話された。

（鴨島読本より）

## 2、鴨島八幡神社

この神社は鴨島町本郷に祀られてあり、社殿は瓦葺き木造で荘厳な構えである。そして広い境内は玉垣がめぐらされている。

祭神は誉田別命、菅原道真、鴨島六之進である。六之進は天正の頃、神社の東北三百メートルのいぢ川南岸に墨を構え威勢を誇っていたが、天正七年、脇城外で細川勢として、土佐の長曾我部軍と戦い戦死した。その武徳を称えて神として祀つたものと思われる。

神社の創設は明らかでないが、棟札には元禄十三年四月と記さ



鴨島八幡神社(正面)



稲荷・事代主神社

れており、社前の灯籠とうろうには明和七年八月、川真田六右衛門、川真田吉右衛門と刻まれている。また、この神社は飯尾天神社の遥拝所ともいわれ、昔はこの神社の氏子が天神社の氏子であったと思われる。

境内には稲荷神社と事代主ことしろぬし神社の小祠が祀られており、稲荷神社は参詣者が多い。また、忠魂碑が建てられており、護国の英霊が祀られている。島居から東へ向けて三百メートルあまりの馬場が設けられているが、競馬は行われたことがない。

この神社の秋祭りには、本郷・殿郷・北郷・中西郷・大西郷から屋台が繰り出された。中でも本郷の屋台は構造がりっぱで、打ち子の衣装もりっぱであった。担ぎ手も大模様の長襦袢に鉢巻きをしめ、派手ないでたちであった。この屋台は明治中頃より車屋台になった。

祭日には、五カ所の屋台が神前にならんで神楽をあげた後、社殿の周囲を太鼓や鐘を、ドンドン、チキチン、ドン、チキチンと打ち子が打ち鳴らす音にあわせて、担い手が、ワッシヨイ、ワッシヨイとかけ声をかけ、社殿の周囲を威勢よく練り回り、各地区の若者が氣勢を競った。遠近から見物人もたくさん集まりたいへんにぎわった。勇ましくも威勢のよい思い出である。

昭和二十年の終戦より、屋台を出すことは少なくなったが、昭和五十五年頃より大西郷の屋台だけが出されるようになった。久しぶりに屋台(ヨイヤシヨ)が出されたのを祝い、境内で餅投げも

催し、祭り気分を盛りあげている。なお、本郷の屋台も、会員諸氏の熱望で働きかけ、出すことのできるよう協力を呼びかけていきたいとのことである。

境内には、高くそびえる棕の大木の根幹が洞穴となり、樹皮で支えられた棕の古木、楠の大木があつて、この神社の古さを物語っている。また社務所があり、松村宮司が代々神官をつとめ、神社内外の手入れがゆきとどき、おりおりの神事もみごとに行われ、神域としての荘厳さを保っている。

### 3、秋葉神社

この神社は鴨島の北郷、今の神島の東南隅、県道に面して祀られている。

祭神は火産靈ほむすびのおおかみ大神であるが、秋葉大明神として祀られている。この神様は火の神で、炊事・生活にながり、家運・商売繁昌の祈願から信仰せられたものと思われる。社殿は瓦葺き木造であつたが、今は銅板葺き木造の小祠で、コンクリートの高台の上に鎮座されている。この神社は、北郷の人びとからは氏神のように崇拜されている。

建立時はつまびらかでないが、玉垣に刻まれた人びとの名は明治中期に活躍した人である。また、以前の灯笼には明治十一年九月十日と刻まれているので、建立は明治以前であろう。

玉垣に囲まれた境内は、以前は広がつたが、昭和二十二年の鴨島の大火のため社殿のほか、屋台格納庫も焼失した。その後、道路の拡張や消防庫の設置によって境内はせまくなった。境内に立木は少なく、ただ東内側にせんだんの木が道の上まで枝をひろげていたが、これも昭和五十五年頃に伐採され今はない。

この神社の夏祭りの夜市は「秋葉はんの夜市」といわれ名高く、その夜は境内の内外に、菓子・玩具・飲料、また苗木・鉢植え・農具などの出店がならび、のぞき芝居が出て、調子のはずんだ歌とおもしろいのでき絵でにぎわい楽しませた。この夜市には、納涼かたがた参拝する人が大勢集まって、押すな押すなの盛況であったが、戦後はなくなってさびしい思いがする。

(1) にぎやかだった秋葉はんの夜市

日 野 喜久雄

秋葉神社では、今も七月二十日から一週間、夏祭りの夜市が催されているが、昭和七、八年頃までは、ずいぶんにぎわったものである。その後は非常時を迎え、臨戦態勢に入り、つづいて日中戦争を皮切りに第二次世界大戦と、暗黒の時代となって、この夜市もさびしくなった。

昭和七、八年頃までは、楽しみの少ない時代で、人びとはこの夜市を楽しみに待っていたものだ。真夏の暑いときであるから、神社への参拝はそれぞれ浴衣ゆかたを着た。特に女性ははでな浴衣をきれいに



秋葉神社

着つけ、女の子は色つきのかわいらしい長袖の浴衣を着せてもらい、小遣い銭をたずさえて、夕涼みかたがた町通りを歩いてここへ出かけてきた。町筋の店は店前に縁台を出して、うちわで風を入れながら、前を通る人を見て愛嬌をふりまいていた。

神社に近づくと、のぞきのはずむ音が聞こえ、人びとの心はずんで、自然に足が早くなる。神社の三十メートルくらい手前から、テントや幕で屋根を張った夜店がならび、鳥居の内外には、のぞき台が多いときには四台もきて、ランプやガス灯で看板絵を照らし出していた。

人びとは神前に賽銭をあげてぬかずき、神官から御幣ではらってもらい、帰途、店を見たり買い物をしたりした。中でも、のぞきは、みんながどんなものがくるかと心待ちにしていたので、その前に大勢の人が集まり人気があった。料金は二、三銭だったが、経済低調の当時のことで、多くの人は、のぞき歌を聞きながら看板絵を見るだけだった。しかし、劇の歌文句はよく覚えた。五十年を経た今でも、それを覚えていいる人もある。

それでも、少数の人は料金を払って、のぞき劇をのぞき見て楽しんだ。のぞきは、次々に展開する劇の絵をレンズの窓からのぞいて見るもので、歌う人は細い篠竹を二本ずつ両手に持って、のぞき窓の上の板をばしばしとしばき、その音に調子をあわせて歌うもので、歌にあわせて絵も移っていく。劇絵の上部には、たたき台があって、たたき台の後に劇絵を引き上げていく。その上には看板絵が掲げられ、劇が進行していくにつれて看板絵も中央から左右にひらかれ、劇の一部を見せて、客の心を引きつけた。看板絵は、ときよると押し絵にして錦をはった豪華なものもあった。

劇の演題には、金色夜叉、不如帰、須磨の仇波、流れ川の人柱、佐倉宗五郎、まま子いじめなどがあった。

のぞき節の歌詞は調子のよいもので、その一節に次のようなのがあった。

「熱海の海岸散歩する貫一・お宮の二人連れ、ともに語るも今日限り、ともに歩むも今日限り……」  
(金色夜叉)

「浪子は白いハンカチを打ちふりながら武夫さん、早く帰ってちょうだいね……」(不如帰)

「ところは北地の日開谷、日開谷の国や上喜来、小名こなを申せば西原の、大蔵の娘に名はおはん、おはん十七花盛り、彼氏は十九の恋盛り、花と恋とのことなれば、互いにしのびしのび会い……」

夜店には、飴棒・せんべい・白輪・ニツキなど菓子菓子を売る店、ニツキ・ラムネなど飲料水を売る店、泥面・紙面・コマ・バイ・鉄砲・風船などおもちゃ類ちやを売る店、ナシ・カキなど果物を売る店、綿菓子・カルメラをつくりながら売る店、スイカを売る店などがずらりとならび、威勢のいい売り声がひびく。境内の東側では、農具や刃物を売る店もそろっていた。

この夜市は、人が押しあうほどのにぎにぎしさであった。そのにぎわいの中心は「のぞき」で、のぞきが何さき(何台のこと)きたと評判になるほどであった。

楽しみの少ない当時、秋葉神社のにぎやかな夜市は、知る人びとにとってなつかしい思い出である。

## (2) 心に残る「秋葉はん」の夜市

柳 川 久 子

私は名東郡佐那河内村で生まれ、鴨島町へは昭和六年にきて、現在までこの土地で暮らしています。鴨島町へきた当時、この近くの秋葉神社で一週間の夜市があり、「のぞき」という変わった方法で芝

居を見物したり、また、いろいろな食べ物を食べたり、見聞きしたりし、私の心の思い出のページの片すみにひそんでいます。

これが、私の昔の記憶のひとつです。

(3) さびしくなった秋葉町

鈴 木 花 子

今の元町は、秋葉神社があつたので、以前は秋葉町といっていました。秋祭りの前日には、子ども相撲があり、おみこしが町をねり、屋台が並んでにぎわつたものです。また夏祭りといって、七月中頃の一週間、動物園やのぞき出店などがたくさん出て、秋葉町一帯は大勢の人出でにぎわつたものでした。それが年とともにさびしくなり、今では祭りのおみこしも出なくなり、子どもたちには、楽しいお祭りの雰囲気味わせてやれないのがとても残念に思います。

(4) 秋葉神社の夏祭り

鈴 木 衣 子

祭りの前日には、本町から駅前・銀座通り・菊見通り・旭町の東側まで、ずっと縄に紅白のおしめを

つるし、軒下へ棒でかけて回るのを手伝ったものでした。

そして人形ひとがたを各戸に配り、家族の名前を書いて、ご祈禱してもらいました。それが一週間もつづき、サーカス・のぞき・夜店が出てにぎやかでした。

そのときの見世物に大蛇（錦蛇）がきていて死んだので、誰れかがもらい大きな柱を三本並べた上で皮をはぎ剥製はくせいにし、小学校へ展示してありました。今はどうなっているのでしょうか。また、ワニの剥製も、川真田廉太郎さんが台湾とかマレー半島など南方で、染料の事業をしていた関係で、小学校へ寄付し、飾ってあったそうです。

## (5) 和氣あいあいの秋葉講

寺 井 光 一

秋葉神社の年中行事につきましては、一月十八日の春市、七月十八日を終わりの日とする一週間にわたる夏の夜市、十月十八日の秋葉神社本祭り、宵の晩に行われた景品、たくさんの素人相撲などがありました。ほかに、地元氏子有志の間に古くから伝承されてきた「秋葉講」という行事がありましたので、それについて書いてみました。

秋葉講は、いつ頃からはじまったのか、おそらく秋葉神社が建立されてから間もなくはじめられ、代々受け継がれてきたのではないかと思われまます。

私の子どもの頃から、毎年旧正月明けには講の集まりがあつて「当屋」のあたった年には、よく案内にやらされました。そのときの口上は「今夜、うちで秋葉はんを拝みますから、おたの申します」とい

って回るのでした。講中の家は十軒くらいしかなかったように思います。おもに寺屋敷（北郷という秋葉はんの「だんじり」の氏子で、中踏切りから北を寺屋敷と小字されてきました）と、往還（私の子どもの頃は、南の町筋はこういっておりました）では、秋葉はんの前のおはつつあん、二、三軒東の河野のぬいさん、秋葉はん裏の岸田の淳やんと、三軒であったように思います。

秋葉神社の本社は、森の石松で知られている秋葉の火祭りの行われる遠州の秋葉神社で、その末社が丈六寺の西側にあったそうで、当屋の当番は、せっき（師走）のうちに、そこへお参りして、講中のお札を受けてくる役目がありました。

しかし、この秋葉神社は、私の子ども頃にはすでに火事で焼けてしまって、本社からのお札も丈六寺にあずかってもらっていたそうです。私もその後、丈六寺へお参りしたおり、西側へいってみましたが、山の裾に草に埋もれた石段が十段ほどみえていました。

さて講の晩ですが、床の間に当番持ち送りの古い木箱に納めてあった御本尊（秋葉三尺坊大権現）のお掛軸をかけ、その前にお供えものをし、お灯明を点じて一同正座拝礼し、長老のお先達の発唱にしたがってご祈禱がはじまります。ご祈禱の文句は次の五条で、一条二十回を繰り返して唱え、終わるとお先達がチリン、チリンとりんを鳴らして一同拝礼します。

一、おんひらひらけんぴらけんのそわか

二、おんらみさんまいそわか

三、ぎやていぎやていはらぎやていそわか

四、のうまくさあまんだばさらだせんだんまあかろしやだそわか

五、おんあほきやべいろしやのまかもだらまにはんろばじんばらはらばりたやうん

おつとめがすむと、次の当番をきめるためくじ引きをします。八寸の上に当番のまだすんでいない

家の数だけの丸くもんだ紙がのせてあって、それを引き、まん中に穴のあいているのを引いた家が次の当番です。それがすむと、当屋の用意した大盛りのかきませ（五目ずし）で御神酒をいただき、ひとしきり世間話に花を咲かせて散会しました。

この講も、昭和十二、三年頃までつづいていましたが、戦争がはげしくなると、いつしか消え去りました。

#### 4、喜来若宮神社

若宮神社は、喜来の出口に東向きに祀られており、境内は玉垣をめぐらしている。

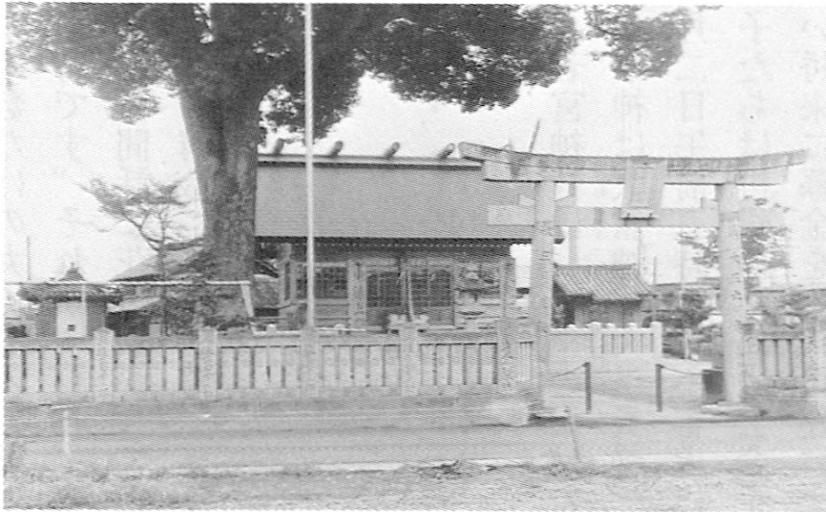
祭神は大雀神<sup>おおささぎ</sup>、大己貴神<sup>おほなむち</sup>、大山祇神<sup>おほやまづみ</sup>で、社殿は昭和六十年一月二日午前三時頃、不審火により全焼し今はない。しかし、氏子たちは再建のために会合をかさね、自治会で役員を選出、近い将来に募金を集め再建に乗り出すことになっている。焼けた社殿の北側には春日祠、南側には秋葉祠、山神祠が祀られている。

創立は明らかでないが、三百五十年前に三百五十両で建てられたと言われている。社前の狛狗<sup>こまいぬ</sup>には寛政十年 当村利右衛門と刻まれている。従って、江戸中期には存在していたと推測される。秋祭りには屋台が出され、五百メートル南東にある馬場



若宮神社(旧)

鎮座地は喜来出口で祭神は大雀神、大山祇神である。鳥居は明神鳥居で拝殿の屋根は、照り破風入母屋造りで本瓦葺きの下り棟である向拝は縫破風で本殿は流れ造りの銅板葺き。御影石の玉垣で囲まれている。



再建後の若宮神社

まで練っていったものである。また、神社には獅子舞いの設備があり、舞いを奉納するため、トントコトントコ、トントコトンと太鼓の音にあわせて若者が獅子の舞いを勇壮におどったものである。

神域は昭和十一年に拡張され、そのとき玉垣も建てられた。建立記念碑が鳥居の内側に建てられている。この神社の馬場は、大正十一年まで喜来最南部、高知生糸工場の南側に東西に設けられていたが、ここへ片倉製糸が誘致されたので、東北三百メートルの庚申答前の今の馬場へ移転されたものである。

※ 若宮神社再建の話……若宮神社は、大正六年に大鳥居、昭和五年には神殿改築、昭和十一年には社地の拡張、玉垣建造等の次々と整備がなされ、氏子尊崇の標となってきました。

ところが、昭和六十年一月二日の不慮の災厄に、社殿は全焼しましたので、氏子達は、総代を中心として再建奉賛会を結成し、募金を始めました。最初は心配していた寄付金も氏子一三八名の熱意と、有志の方々のご協力を得まして、二七〇〇万円と予想外の浄財が集まり、県下初の神明造りの社殿と立派な玉垣が完成しました。

これも役員の方々のご尽力、工事関係者のご努力によるところであります。氏子全員の真心が神に通じた結果と考える次第であります。心から有難く感謝しています。

ふるさと研究会の研究発表の紙上をお借りできまして関係者を代表し厚く御礼申し上げます。

再建奉賛会会長 川村勝一

## 5、若宮八幡神社

——上下島——

若宮八幡神社は鴨島町上下島宮内七三番地に鎮座します。

祭神は大鷦鷯ささぎ尊と天満天神である。

大鷦鷯尊は、仁政を行った仁徳天皇である。天満天神は学徳高い菅原道真である。この方々の徳を仰賛して若宮八幡神社に祀ったものである。

今の社殿は明治三十六年に建立されたもので、上下島の渡部莊吉が棟領として建築した。社殿の東に前の社殿が残存されて、神輿庫となっている。前の社殿の前戸には格子がつけられ、賽銭のなげ入れができるようにしてあったが、修理の時、取りのけられた。

神社の境内は広いが、前の社殿はせまかったので、これを對比して昔より、「腹（原）の大きいのは何」「それは上下島の八幡様の原」といわれた。

神社は北向きで、北向八幡様ともいわれ、神威高く靈驗あらたかだと伝えられている。

神社の始まりは明らかでないが、宝暦以前に建てられたもので、二百五十年位前と思われる。藩政時代の年貢取立人であった数川雪典寄進の灯籠には、宝暦九年八月十五日（一七九一）と刻まれている。境内に放置されてある手洗鉢には、大多和拝知分寄進宝暦十一年八月吉日と刻まれている。

神社の祭は、夏祭と秋祭が行われる。



若宮八幡

夏祭は、六月三十日行われ、夏祈禱ともいわれ、明治中期までは露天市が立って、農具などが売られたそうである。

秋祭は、十月二十五日で、神輿がお旅に出て、氏子の区域を巡り屋台がこれに従いお神楽を奏した。屋台は昭和二十一年出された後は、かつぎ手が不足して出されていない。

一月九日、五月五日、九月九日の節句の前夜、お日待が行われ、氏子が集まって、翌日の日の出を待ち、その間神事が行われた。

境内には、農漁の神として、恵比寿祠、国造りの神として天照大神の外四神を祀る地鎮祠、山の守りとして山神祠が祀られている。

地鎮祠の祭は、春秋の社日に行われ、祭事は従来、庄屋であった日野家の者が当っていたが、昭和二十二年以降松村宮司が行うようになった。

境内には現在、大椋、大銀杏、大樟がそびえているが、前には、大松、大榎、大ポプラ、大榎、大あさだ、モチの木が立っていた。

玉垣は大正九年建てられ、上下島で成功した人、建設業武智正次郎氏、喜劇俳優武智故平氏の協力を得て、氏子が建立した。

※武智正次郎氏、武智故平氏については、人物の章を参考下さい。

## 6、杉尾神社

杉尾神社は喜来の乗島に建てられている。昔は神域の北裏が、江川の前身である南吉野川の低い堤防



杉尾神社

に接していたので、洪水のたびに水害にあい、神殿がたびたび流されたことがあったと伝えられている。祭神は大己貴命、市杵島姫命、事代主命で杉尾大明神として祀られている。

広い境内は玉垣をめぐらしており、その南側を東西に二百メートルくらいの馬場が設けられ、社前から東八十メートルくらいの馬場に鳥居が建てられている。

この神社の縁起は明らかではないが、棟札には寛永八年正月二十三日 願主 藤井祐念と書かれてあり、この年は昭和六十年から三百五十四年前のこと、徳川三代将軍・家光の時代である。また、天正の

頃、神社の東近くに壘を構えていた乗島入道来心は、天正十一年、およそ四百年前、細川勢として土佐の長曾我部勢と中富川で戦い戦死したが、その後、慶長年間に吉野川の大洪水があり流失したので、来心の子・了本が父の守り本尊の地藏尊をご神体とし、杉尾大明神を請願して神社を再建したと伝えられている。

また、昔、洪水のとき、吉野町柿原小笠の十二神社のご神体が杉尾神社のところへ漂着したので、この神を祀って杉尾神社を建てた。そのため、昔は十二社神社のみこしが吉野川を渡御して杉尾神社まで御旅をせられたとの説もある。また、乗島来心の妹に藤井石見を養子にしたが、この石見が神社を建てたとの説もある。

社殿の東に西むきの小祠が二つある。北にあるのは藤井家が先祖として祀る藤井石見守の祠で、南にあるのは乗島家が先祖として祀る祠である。

乗島入道来心と藤井石見守の墓は、この神社の東百メートルに建

てられており、位牌は神社の南四百メートルにある徳住寺に安置されている。

春祭りには明治中期まで境内で市がひらかれ、農具や苗木の出店がならんで、大勢の人が参拝をかねて買い物に集まり、たいそうにぎわったといわれている。秋祭りには屋台が出され、境内や道を練り歩き、お祭り気分を盛りあげた。

神社の西から北裏にかけての境内には、喜来尋常小学校が建設され、児童が学んでいたが、明治四十四年、鴨島尋常高等小学校が建てられた際、統合されて廃校となった。

藤井寛太郎氏の頌徳碑も境内にある。

※ 藤井寛太郎氏のことは、人物の章を参考下さい。

## 第二節 鴨島の寺院

### 1、徳住寺

一、位 置 喜来一三九の一番地

二、宗 派 浄土真宗、西本願寺派

三、寺 号

專修山 徳住寺

四、本 尊

阿弥陀如来

五、開基及び沿革

過去帳にはまず乗島入道来心の名がある。

寺記に「来心は勝瑞城の三好存保公に仕え、子源三郎・源五郎が幼少のため、備前国の城主藤井石見守豊住を養子として、のち剃髪し乗島入道と号す。天正十年八月二十七日に長宗我部元親の兵火にあ

い、翌二十八日戦死す。」とある。豊住は顕如上人の弟子となって出家し、浄心と改め来心の霊を慰めるため、草庵を建て専修念仏した。源三郎・源五郎の兄弟も出家して、浄心の草庵をつぎ了本了観と改名し、乗島家の菩提を弔うたのである。(天正十七年の喜来村検地帳に了本了観の名がある。)寛永永七年円了になって徳住寺と称え、同二十年本堂を建立したとある。

六、歴代住職

浄心法師―了本法師―新了法師―円了法師―西念法師―尊説法師―見樹法師―恵林法師―教岸法師



徳住寺

— 靈岸法師 — 先涯法師 — 宝岸法師 — 等現法師 — 各立法師 — 僧哲法師 — 現住

〔麻植郡史 鴨島町誌より〕

## 2、常教寺

一、位 置

鴨島七六四番地

二、宗 派

真宗、興正派

三、寺 号

一念山 円寂院

常教寺

四、本 尊

阿弥陀如来

五、開基及び沿革

過去帳によると、天文十三年に僧善正が、この地に開基したとある。だがその後の沿革は、天正年間の兵火にあつ



常 教 寺

たのと、正保年間に再度火災があつたため古記録等が焼失して不明である。

〔麻植郡史 鴨島町誌より〕

## 第三節 信

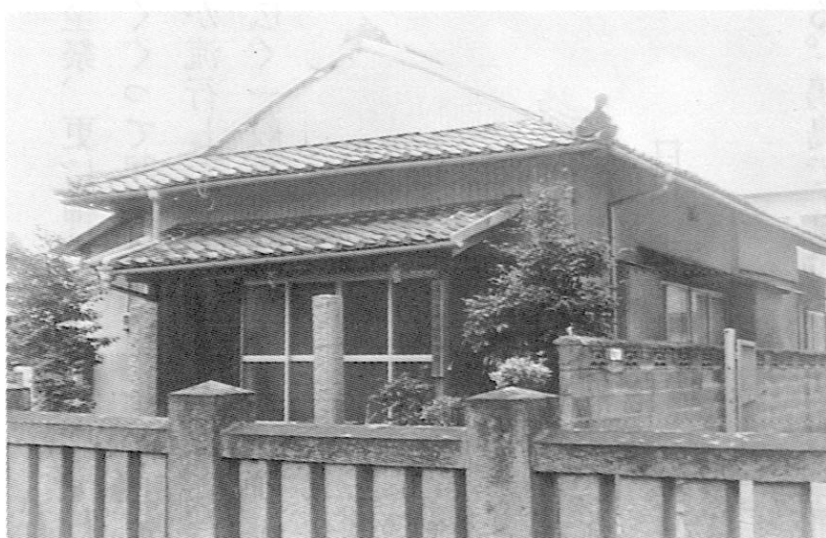
### 仰

#### 1、黒住教

備前に誕生した黒住教が、阿波に入ったのは、万延元年美馬郡舞中島で布教をはじめた記録が一番古い。鴨島地方では明治五年頃、鴨島村一二四番地、川真田弥三郎居宅を借りうけ説教所を設け、川真田六衛が講頭となっている。

明治二十六年五月現在地同村二八五番地に、新築移転した。神道黒住教勇進説教所と命名、翌年二十七年六月黒住教鴨島教会所と改称し、現在に至っている。

教勢は時代により盛衰があつたが、郡内はもとより名西、名東、



黒住教

板野の各郡に及んでいる。

行事のおもなものは、教祖の生誕を祝う教祖祭、立教を記念する冬至祭、更に神道の主である大祓祭等である。なかでも祓祭は有名で設立以来、藁わらで輪をつくり、これをくぐって罪穢を祓い、清浄心となつて、神前で無病息災を祈願したものである。昔は、暑い季節に疫病が流行したので、無事に過ぎたい願いをこめ、夏越しの祭、茅の輪をくぐるので輪抜けの祭りとして広く一般の参拝者多く、門前に出店を出す業者も多くにぎわつたものである。

## 2、鴨島の庚申さんの調査研究報告

日 野 喜久雄

### (1) はじめに

“庚申さん”と呼ばれている庚申塔は、我が国の各地に祀られている。鴨島でも本尊が四手の青面金剛の姿で書わされているのが二ヶ所、六手の青面金剛で表されているのが五ヶ所、猿田彦命の文字で表されているのが三ヶ所ある。

どの庚申塔の前にも水鉢や線香立が置かれているが、祭事は神官が行うのである。

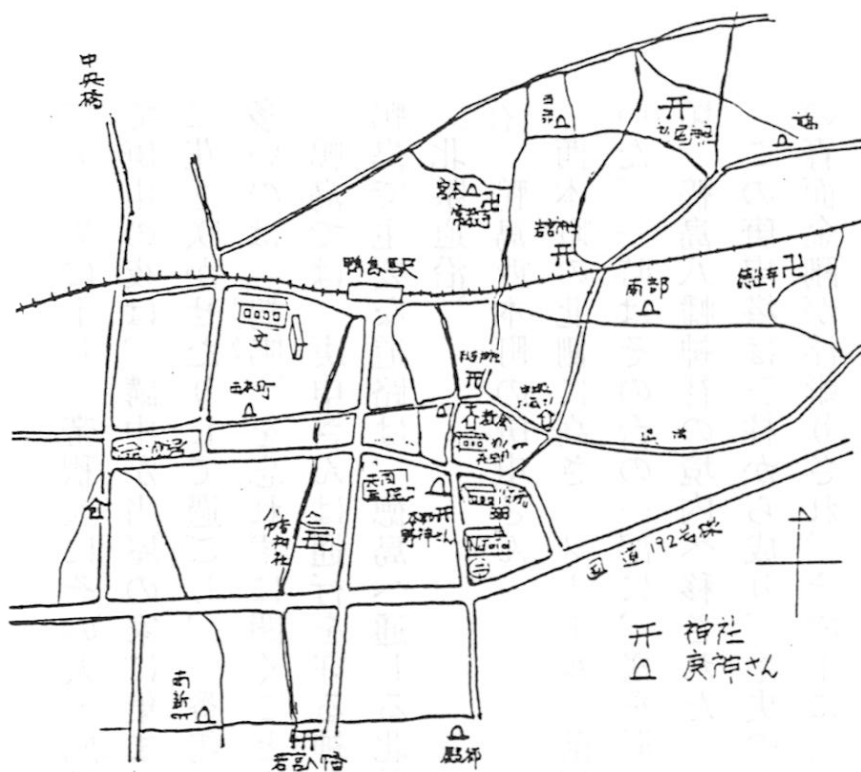
他の地では、青面金剛や猿田彦命の外の神として祀った所もあった。阿波藩では、庚申さんの御本尊は、全て天照大神あまてらすおほのみかみの御孫瓊瓊杵命ニニギハヤヒが御降臨こうりんの時に、先導をつとめた猿田彦命であると定められ、その総社は大麻比古神社であるとのことである。猿田彦命は、天孫一行の先導をして、手向う者があれば、打

払い打従えた勇猛な神であったので命を天狗の姿で表現している。

(2) 庚申信仰が起こった由来について

奈良時代、我が国から国使や学問僧が支那へ渡るようになり、この人達によって庚申待の行事が伝えられた。平安時代には宮中や貴族の間で娯楽として行われていた。室町時代や戦国時代になると、庶民の間にも広がり、徳川時代に庶民の間に定着した。

庚申信仰では和を重んじ、見ざる、聞かざる、言わざるを信條とするようになった。これを三つ猿に表現されている。



鴨島の庚申さんの位置図

徳川幕府は庶民が幕政に関心をもつのを好まず、ただ服従することを求めていたので、三つざるの思想は、幕府の求めるところに合致した。幕府は、寛文の頃から庚申塔の建立を勧誘するようになり、その頃から庚申塔が各所に建てられている。従って、庚申塔には、本尊の下に三つ猿が彫り出されていることが多い。

庚申塔が各地に建てられるようになると、近所の人達は、御利益を願って「庚申講」をつくり、集団で、庚申信仰の行事を行うようになった。その中でも庚申の夜、「庚申待」をすることは重要な行事とされた。

庚申の日は六十日に一度来る、かのえさるの日である。この庚申の夜、人が寝てしまうと、頭の中、腹の中、足の中に潜んでいて病気を起こす三尺の虫が、体から脱け出し

て天上界に上り、帝釈天にその人の悪業を告げると、その人に天罰を与えられると言われている。それで庚申の夜は、講中が当屋の家に集まり、寝ないで庚申さんの供養をしたり、酒食を楽しんだり、談話に花を咲かせたりして過ごし、一番鶏の声を聞くまで起きていた。庚申塔に鶏を彫り出してあることが多いのは「鶏鳴」を忘れずに聞くことを印象づけたものであろう。

鴨島では、庚申さんは通行を守る神として、通行の多い所や寂しい所の道端に祀られている。昔から鴨島で主要な道路は、徳島へ通じる北県道と西麻植絵馬堂から中島で南県道に出合う中道である。

#### 〈北県道沿〉

(イ) 鴨島西本町の庚申さん

西本町の北側に高さ一メートル、前幅三メートル、奥行二メートル位の台座の上に庚申塔が祀られていた。一時はその台の一部に、檻を置いて、猿を飼っていたこともあった。この庚申さんは昭和四十年頃、鴨島八幡神社の境内へ移された。

この庚申塔は三柱から成り、中央の石柱には四手の青面金剛が浮彫りされ、その下に三つ猿が浮彫りされている。塔の側面には安永二年九月四日、西分と刻まれている。西側の石柱には、享保十四年七月と刻まれ、東側の石柱には安政三年、西分と刻まれている。また、塔の東傍に重松申と刻まれた石、猿田彦申と刻まれた石、申とだけ刻まれた石が置かれている。この三ヶの石は庚申さんへの祈願をこめて寄進したものである。



鴨島八幡神社内の庚申さん

※ 由良熊一談……阿部洋品店のところに庚申さんがあり、大きな犬小屋に猿をかっていました。「万吉」という名前  
で、なんぞ猿太彦大明神といえますから関係があったんでしょうな、戦後お宮へもっていきました。

(ロ) 鴨島元町の庚申さん

鴨島元町の南角に、昔から小さな庚申塔が祀られていたが、昭和四十年頃から秋葉神社境内の東南隅へ移されている。この庚申塔には四手の青面金剛が浮彫され、その下に三つ猿が浮彫されている。塔の



鴨島元町の庚申さん

側面には明和二年、大道講中と刻まれている。

〈中道では〉

イ、南新町大辻の庚申さん

上下島南新町の大辻に庚申塔がある。この庚申塔は三石柱より成り、中央の石柱には雲に乗った六手の青面金剛が浮彫され、その下に向かい猿、その下に向かい鶏が浮彫されている。塔の側面には延亨四年十二月と刻まれている。西の石柱には延亨四年と刻まれている。主塔の東側にも石柱が立てられていたが、昭和四十年頃なくなつた。主塔の前には供水鉢が置かれ、施主河内屋寿三郎、寛永十三年正月吉日と刻まれている。その西側の供水鉢には施主松浦勝、文化十一年八月二十六日と刻まれている。この庚申さんは中道と上下島の南北道の交わる四ツ角にあつて、古来崇拝されて来たが、近年は参拝者が少なくなり、塔も東へ二遷され一隅に祀られている。

(ハ) 殿郷の庚申さん

鴨島の殿郷には、お堂に納まった庚申さんがある。この庚申塔の石柱には六手の青面金剛とその下に三つ猿が浮彫されていて、側面には天明六年八月と刻まれている。

この庚申さんは、殿郷の人々から厚く信仰されていて祭祀は今も続けられている。お堂の前の道を隔てて北側に昔は大柳が聳そびえていた。ここには狸が棲んでいて人をだましましたことがあったと言われている。この庚申さんの東傍にやまじゅうの蔵が建っていて、その白壁に月夜の晩、柳の枝が影をうつしてゆら揺れるのは恐ろしかったといわれている。ここから東へ一籽きざ位中道を行くと南県道に祀られている中島の庚申さんの所に出る。

(ニ) 本郷の庚申さん

元町南角の庚申さんから殿郷の庚申さんへ通ずる道の西側に、お堂に納まった本郷の庚申さんが祀られている。ここの石塔は荒削りの三石柱であるが、像も文字も彫られていないので、お堂の奥の壁に、猿田彦大明神と紙に書いて張られている。この辺は明治の頃まで家がなくて寂しいうえに、いじ川尻であつたので気味悪い所であつた。また、明治中頃に、この辺で人殺しがあつて、寂しくて恐ろしい所となり、夜など通ること出来ないほどであつた。それで誰かが山路の東方の鴻の山の庚申さんの分神を勧請して猿田彦大明神として祀り、通行の安全を祈つたものである。鴻の山の辺あたの人は本郷の庚申さんは、向麻山の庚申さんの分家だと言っている。鴨島商家の人達は、この庚申さんは願ねがいごとをよくききとどけてくださると信仰が厚く参拝者も多く香煙の絶え間がない。

(第二章 関連記事)

〈喜来方面〉

喜来方面には、昔は大道がなかつたので、庚申さんは裏道に面した所に祀られている。

(ホ) 宮本の庚申さん

喜来宮本にある若宮神社の西近くに、お堂に納められた庚申塔がある。石塔には猿田彦大神と太く刻まれていて、堂前の供水鉢には、明治二十七年三月吉日、施主鎌田直蔵と刻まれている。この塔は、鎌田屋敷の西北隅に狭い道に面していることを思うと、鎌田家が庚申信仰に厚くて家の守りとして建てたようである。

(ヘ) 西分の庚申さん

喜来の西分には、元岸田重雄氏の屋敷があつて、その東北隅にお堂に納められた庚申塔がある。

ここの庚申塔には、六手の青面金剛とその下に三つ猿が浮彫されている。この庚申さんは昔、吉野川の土手へ出る細道であつたことを思うと、岸田家が家の守りとして建てたものらしい。

(ト) 喜来南部の庚申さん

喜来南部に若宮神社の馬場がある。この馬場の北側にお堂に納められた庚申さんがある。石塔には六手の青面金剛が浮彫され、その下に向かい猿、その下に三つ猿が浮彫されている。塔の側面には文政七年十二月と刻まれており、供水鉢には弘化三年と刻まれている。杉尾神社の屋台道に庚申さんがある。

屋台道は、昔は一メートル位の狭い細道であつたが、喜来では主要な道路であつた。

(チ) 乗島南部の庚申さん

乗島南部に神を祀った小地域があつて、そこに昭和五十八年建て替えられた庚申塔がある。小形の石塔に猿田彦大明神と刻みこまれている。元の庚申塔は損んで新に建て替えられている。

(リ) 喜来東部の庚申さん

屋台道を東へ進み、四ツ屋に向かう南北道に出ると、道の東側に喜来東部の庚申さんがある。塔はお堂に納められていて、塔面には六手の青面金剛と三つ猿が浮彫されている。塔の側面には安政四年十二

月、東講中と刻まれている。昔、ここの南北道は吉野川の上手に出る細道で人通りは少なかったが、喜来東部の守りとして、この庚申さんを建てたものらしい。

(3) あとがき

イ、庚申さんの本尊の姿

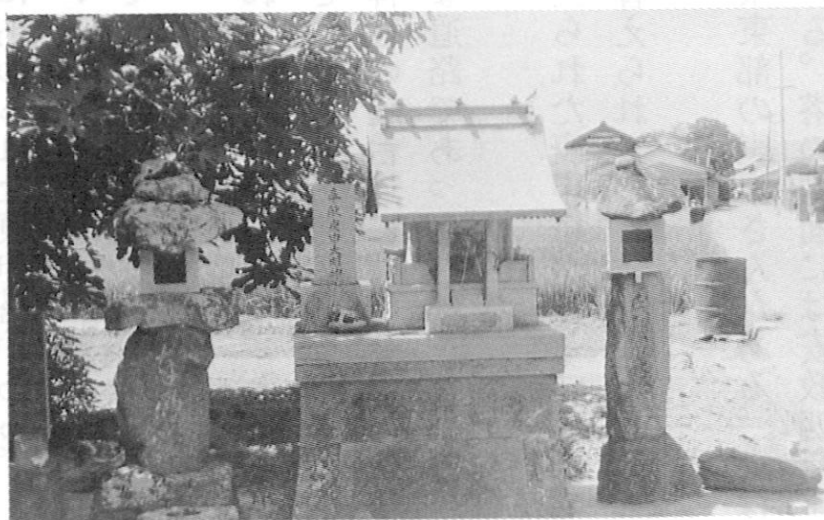
古い庚申塔には、高の原や広畑の庚申塔のように文字を刻んだものが多い。ついで四手や六手の青面金剛を浮彫にしたものが多い。青面金剛はインドの佛様で四手のは六手のものより古いのが普通である。幕末より明治の間に建てられたものは、猿田彦大神と刻まれたものが多い。庚申さんの本尊の姿はかわっても幕末よりは全て猿田彦大神として信仰されている。

(ロ) 鴨島の庚申さんの建立年代

庚申名	建立年代	庚申名	建立年代
南新町の庚申さん	延亨二年(二七四七)	東部の庚申さん	安政四年(二八五)
元町の庚申さん	明和二年(二七五五)	乗島の庚申さん	明治以前
西本町の庚申さん	安永二年(二七七三)	西分の庚申さん	明治時代
殿郷の庚申さん	天明六年(二七六六)	宮本の庚申さん	明治時代
南部の庚申さん	文政七年(二八四)	本郷の庚申さん	明治時代

(ハ) 庚申信仰の盛衰

我が国で庚申塔が建てられるようになったのは、三百年位前の寛文の頃であるが、鴨島では延亨二年



喜来東部の庚申さん

の南新町のものが二三九年前に一祠が建てられている。つづいて六祠が建てられた。この頃になると、庚申講もあつて庚申待の行事も行われたはずである。明治新政になって、庚申信仰は衰えたが、鴨島では喜来や鴨島で三祠が建てられている。明治になって建てられたものは、個人の信仰によって建てられたようである。団体による庚申信仰は明治から大正、昭和へと衰え、大東亜戦争後は著しく衰えた。しかし本郷の庚申さんは参拝者が多く香煙の絶え間がない。また、西麻植広畑では二ヶ所の庚申さんが復興されている。また、庚申さんの総社である大麻比古神社は参拝者が絶えず、特に正月には県下一円から多数の参拝者が押し寄せている。

## (二) 庚申さんの供物

庚申さんには食べ物や飲み物が供えられているが、くくり猿やつんぼ石が納められている。猿は庚申さんのお使いであると、言伝えられてから、祈願のしるしに納められるようになったと思われる。つんぼ石は穴の通った石で、この穴に紐を通して願い事が通るようにとの念願で納めたものらしい。

## 3、ご先祖の祠

鴨島町内で、四、五百年位前の古い家（本百姓をしていた家と思われる）では、御先祖様を神様としてお祀りしています。

喜来でも最初は、十軒程しかなかったそうです。現在も尚、祠を中心として、それぞれの株内で、御先祖祀りをしている処とろを調べてみました。十六軒ありました。

乗島家……杉尾神社境内の東側の古いお堂で乗島入道来心の子孫がお祀りしている。天正十年八月二十

八日、長曾我部に討たれた入道の墓は、杉尾神社より東、桑原マンション建設中の南の畑の中にある。「還源院乗島入道来心居士」の大きな墓碑がある。

藤井家……杉尾神社境内の乗島家の北にある玉垣がある祠。乗島入道来心の娘、潮香女を妻にした藤井石見守の子孫で、石見守の位碑は徳住寺にある。

春日神社……若宮神社の本殿北側にある。野田、岡本一族の株内でお祀りしている。春日株といって、今も二十軒程の株内で祀っている。

佐渡家岸田宮崎克一家……杉尾神社境内西側に祠あり。

森本家……喜来東部、坂東恒一さんの東、県道南側に祠がある。森本、森、大西、岸田家でお祀りして日野家……日野義勝氏の御先祖。殿郷の国道南、庚申さんの前にある。

「吉野ノ朝臣日野中納言資朝に源を発しその後裔日野右近、手島村貝米の郷に住す。嫡子治郎右エ門の弟佐平治、鴨島城主六之進の養子となり尚日野姓を称す。」祠の前の碑に記してある。

鎌田家……先祖若宮神社南、岸田栄作氏北側に祠がある。

八幡大菩薩……麻植保一氏のご先祖で、宮崎克一さん東隣り福田家に祠がある。

川真田家一族……上下島八幡神社の境内南側にお堂あり。聞くとところによると、川真田家から、八幡神社に土地を寄進し境内を広げたとき、お堂を新築したという。

笠井家……乗島杉尾神社鳥居の東側に祠がある。笠井・三井家でお祀りしている。

大膳……喜来乗島、清瀬さんの塀の外、東南部に小さな祠がある。屋号「大膳」という大家があったが、今は何もなく、祠だけがポツンと畑の中に残っている。

坂本家……坂東恒一さんのご先祖で、祠は、喜来乗島麻植保一さんの工場の東側にある。徳住寺に過去帳があり、四五〇年祭もしたという。

岸田家……岸田善吉さんのご先祖で、祠は若宮神社玉垣の外、西北にある。

岸田家先祖……カネシメ、岸田金物屋など一族。喜来宮本、奥田さん東側に祠がある。

鈴木家先祖……本郷鈴木文男氏方に祠があるが、本郷・殿郷の地名に関係があるのかホンデン、又はホウデンサンといって、お祀りしている。一族の中の豊島屋（テシマヤ）は、代々語りつがれているのに、昔は駄丁中継のようなことをしていて、駄丁の都合上武士を宿泊させることもあったため、その関係で後に旅館をしたという。

岸田大明神……重清家祖先で若宮神社前の田の中にある。

美馬郡重清村の城主、重清豊後の守長政と称した。天正六年正月二十八日、長宗我部に通じた大西上野介、久米刑馬助とが重清城に來り、酒宴中に不意に騙し討ちにあい、妻女はひそかに幼児をつれ、家來数人と舟で逃れ、吉野川をくだり、当地に來て隠れ、定住した。家來はその後、順次分家し、享保文化の頃には、付近に十七戸の家來がいた。初代次郎六郎は、長政の末子で、以來喜來に住み今日に至った。今、五輪の塔には、長政と内室を祀つてある。

#### 4、乗島郷の由来と伝説

##### (1) 弘法大師と藤井石見守の伝説

この地は元來、吉野川の中州であった。吉野川は堤防がなく、洪水のたびに川筋は移動していた。そして上流より流れてくる土砂により、各地に島を作つた。乗島はその中の一つであり、ここに人々が住み着いたと思われる。

鎌倉時代にこの地に居住した者の内、乗島姓の豪族あり、乗島という地名が付けられたとも言ひ伝えられていたが、もとの地名をとつて乗島姓としたかもしれない。この豪族が鎌倉時代より、小城を

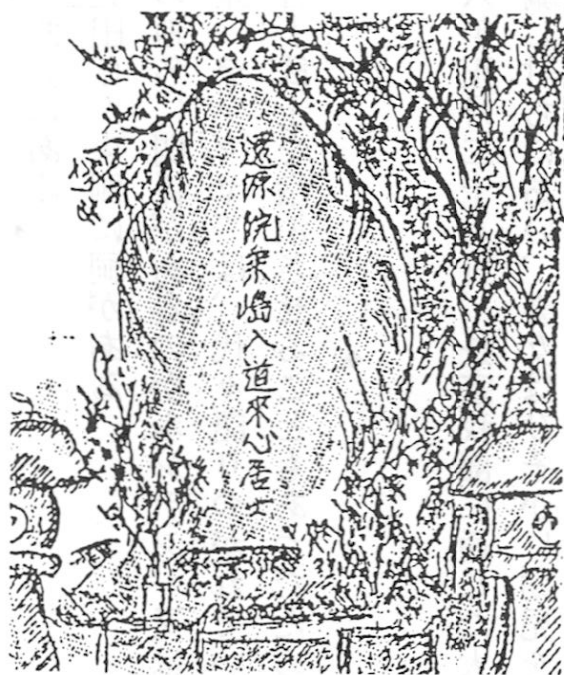
築き、地域を支配していた。

室町時代、細川・三好の支配下にあつて、乗島城主であつた乗島入道来心の陳屋は、現在の石垣の姿より見ても、小さい城であつたと思われる。

この時代の吉野川は、現在の河跡といわれている山の北側を洗い、今の西麻植から鴨島中央部である現在の協同病院（以前の川真田家）の北を流れ、「中塚」と呼ばれていたところへ流れ、麻植塚から向麻山の北へ流れ、現在の飯尾川と合流していた。中塚には「河原畑」という地名があり、現在でも大雨が降ると水がひかない低地帯となっている。最近まで北「万」北側は「いぢ川」といわれ、東西に細長い池があつた。その以前は鴨島城跡で「鴨島六之進」の居城となつていた。喜来の乗島入道来心と同じように鴨島を支配していた。この川の南が鴨島村で北が喜来村となつた。

さて、乗島郷の最も古い伝説は、弘法大師がこの地に暫く滞在していたといわれる。位置は杉尾神社の東南の一角で、現在も大師堂がある。言い伝えによると、弘法大師は讃岐より阿波に来て、八十八ヶ所の一番靈山寺から十番切幡寺まで建てられ、吉野川を渡り乗島郷に着いた。そして庵を作り住んだといわれるが、毎年の洪水でこの地を去り、南の山麓、現在の十一番藤井寺を建てたといふのである。

次に乗島入道来心は、長宗我部が西と南から阿波国を攻めてきたので、勝端を守るため中富川の合戦に参加し戦死した。天正十年八月二十八日であつたが、その後「還元院乗島入道来心居士」と墓石に記されている。建立者は佐藤



乗島来心の墓

姓の者が五名、藤井三木助・藤井齊太・山路藤井一当・村中藤井乗島一当とある。一当とは一族のことと思われる。

乗島郷では乗島・藤井の二姓があり、これは来心の妹を妻とした藤井石見守の子孫であるといわれる。藤井石見守は元々中国地方の浪人で、岩見国秋月の尼子氏の家臣であったが、厳島の合戦で大内氏との戦い敗れ滅亡した。残党は落武者となって岡山市東部に藤井郷をつくった。現在は藤井町となっている。この当時の一人が弘法大師を慕い、四国順礼をしていて、先の庵を尋ね乗島城へ立ちよった。そして話が合い滞在中に來心の妹を嫁にもらい一家を建てたというのである。そして石見守も中富川の合戦に戦死した。その子孫たちであるといわれている。

## (2) 金屋・中屋・江戸屋

乗島郷は川中島で住民も少なかったが、徳川時代には土地が藍作に適していたので、人々が集まり戸数も多くなったと思われる。喜来乗島という地名は原因不明であるが、県内にも喜来の地名があり、農作物に適したところに喜んで集まって来たという意味だと思われる。

喜来の中央部が昔の乗島郷で、杉尾神社東側に城跡があり、東側に金屋、その東に中屋、その東に江戸屋と乗島藤井一族の広い屋敷を持つ家が三軒並んでいた。

江戸屋は分散、金屋は藤井増太郎という画家、書家として名があったが、昭和初年死亡した。増太郎には娘があったが、現在不明である。江戸屋には分家が二軒あって続いている。

中屋も健在で籐と称し、藤井姓を名乗り、分家が一軒あり、この分家より朝鮮の開拓王・藤井寛太郎、本家より株屋としての寺田洪一が出ている。尚、乗島藤井一族は藩政時代・蜂須賀氏に士分として仕えたと思われる。

筆者の家も江戸屋の分家で、子供の頃、麻の上下の登城着があり、殿中差しと称する見事な小刀があ

つたが、中は竹光であった。

現在では乗島姓は少なく、藤井姓が大部分であつて、その理由も不明であるが、ご先祖祠は杉尾神社の境内で、乗島の家が藤井の先祖を、藤井の家が乗島の先祖を先祖としている。

また、氏神である杉尾神社は、文久五年の読まれる文字が見える。洪水の時、大きな杉の大本が流れつき、社殿を建てたような内容がかすかに判読できる建て石がある。

この神社の西側に小学校設立時、合併したといわれていて、昭和初年まで古い校舎が残存していた。以上は、子供の時代に聞いた伝説と私なり調査して記載してみた。歴史的に真実であるかどうか否かは何の保証もないが、全くの作りごとでないと思つてゐる。

乗島郷 江戸屋分家 藤井 治

### (3) 岸田六郎左エ門のこと

島勝氏の祖先の岸田六郎左エ門は、蜂須賀公に仕える馬術の名人だった。

ある日、殿様の命で、椎宮神社の段をかけのぼり、梅の花を手折り、おりる途中、馬腹に身をかくすなど、今でいうアクロバットの的なことを被露して、人々をおどろかしたという。

殿様から、「木馬で登城できるか……」といわれた。門には、石の碁盤があるので、それを取除いてくださるならと、お答えした。

早速、取除かれた。

木馬を左右に大きく動かし、本当の馬のように、ポツカポツカと、音をたてて登城した。殿様は、末おそろしく思い、かえつて六郎左エ門を丸亀に追放してしまった。

丸亀の殿様はそれを知って召し抱えようとしたが、「二君に仕えず」と、お断わりし、道場を開いて指南した。

六郎左エ門の墓は、丸亀の寺にある。

昭和の初め頃までは、おばあさんにつれられお詣りしていたが、その寺が何処かは分らないそうである。小さい頃、陣羽織、カミシモなどもあったようである。

六郎左エ門が丸亀へ去ったあと、岸田では都合が悪いというので、島勝家の養子となり、現在に至っている。

※岸大明神……島勝氏、岸田家のご先祖をお祀りしている。その祠の横に大きな丸い石があり、岸田銀蔵という名が彫つてある。これは、杉尾神社の力石で、銀蔵という人が持ちあげてもち帰り、置いたそうである。杉尾神社には、それより大きい力石があったそうだが、今は見えない。

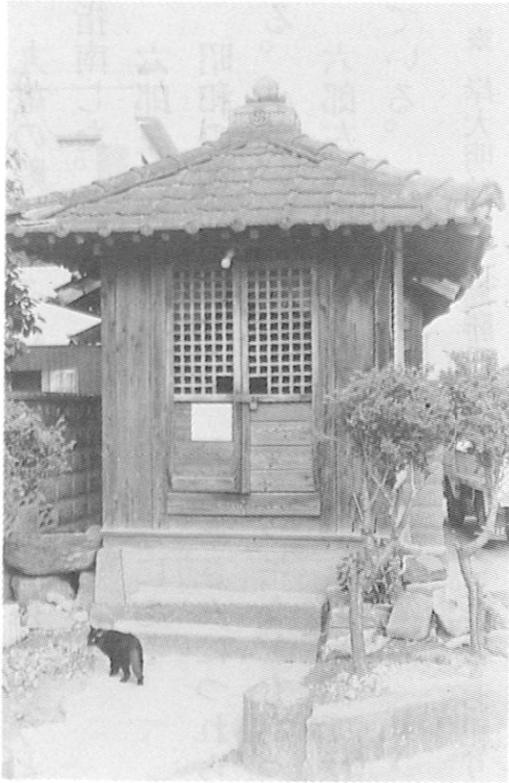
祠は、喜来乗島、島村氏宅の北にある。

岸 田 実 衛

## 5、中塚のお地蔵さん

今をさかのぼる三、四百年前は、吉野川は東新町の北側を流れていました。台風で大雨が降り、水が一面に流れる時、鴨島駅東から南へ、秋葉神社北手より東へと、片倉製糸南と現在の東新町（旧中塚）の北側を東へ流れていました。

私が子供の時は、通行ができない程流れていました。現在の地蔵尊の北手で、台風や大雨の後で魚をすくいました。六十年位前のことです。



中塚の地藏さん

その昔、吉野川の本流の交通は川舟でした。その舟をもやいだのが松の木で、北側の洲に一面、松並木がありました。今の地名も、松本郷まつもとといって残っています。その渡船場も、今の地藏さんの所でした。この地藏さん建立のいわれを、昔の人からの云い伝えですが、おぼえているままにお話します。

昔、台風がきて大雨をふらせ、この川が増水していたにもかかわらず、無理して多人数を乗せた舟が渡っておりまして。川の中程まですすみましたが、ついにバランスを失い、舟は転覆し、乗客全員が濁流へ投げ込まれました。多くの水死者がでたそうです。ほとんどの死者は身よりの者が引き取り葬いましたが、身元不明者も多く近隣の者が無縁法界の佛として合葬したとのことです。

延享三年七月四日と、お地藏さんの台石に刻まれています。

今の地藏さんは、元はもう少し東の方の、今の県道の中央にありました。

鴨島町の下水と県道の拡張工事のため、故岸田照雄氏「若杉組」が建設工事中、お地藏さんを西側に移転するため、敷地を掘りさげている時、土の色が黒ずんでいるのが数個あった。この土が佛さんかと思

い、袋に入れ、現在の安置所の下へ埋めました。

これは、岸田商平さんの証言です。その後この地藏さんは、子安地藏として祀られ、界わいの信仰の的で、現在も遠近の人が参拝にきて、線香の絶えたことはありません。

# 第八章

## 鴨島の建物の変遷

世の中のうちりかわり

その1



## 第一節 鴨島の建物今昔

### 1、はじめに

昔から、吉野川が氾濫すると、水流は勢いにまかせて流れ、人の安住を許さなかったが、やがて水流の間に、鴨島や上下島、喜来のような小高い洲ができた。ここに農家が定着し、葦あしや麦藁わら葺ぶきの家を建てた筈はずである。はじめは農家が点在していたと思われるが、中世になると、支配者が配置され、住民もふえてきた。

藩政時代になると、今の鴨島街筋は土地が高く、吉野川水運の便もあり、多くの人定住し、藍作や農産物をもとめるようになった。そして商家もできはじめた。

明治三十二年、徳島鴨島間に鉄道が敷かれると、さらに交通が便利になり、鴨島に家を構える人がさらに多くなった。

明治末、南吉野川がせき止められて、水害のおそれがなくなり、新開地が生まれた。製糸工業が栄えてくると、町へ出入りする人も急激にふえた。そして鴨島には各所に住宅や農家、店舗が続々建つようになった。

## 2、寺社の建物

神社は氏子の尊崇する神を祠る殿堂として、寺は信者の信仰する佛の坐す殿堂として、多数の人が多額の浄財と最高の技術を結集して、壮厳壮大に建築されている。(第七章参考)

天文の頃、鴨島の常教寺が開かれ、天正の頃、喜来の徳住寺が開かれ、昔のままではないが現存している。

慶長の頃、喜来の杉尾神社が建てられ、藩政時代には鴨島の八幡神社、上下島の若宮八幡神社、喜来の若宮神社が建てられた。

建立当時の規模はわからない。その後、増改築や火災、水害があつて建て替えもあつたが、今日見る壮大壮厳な宮造りの殿堂は、次第に立派になってきたことだろう。

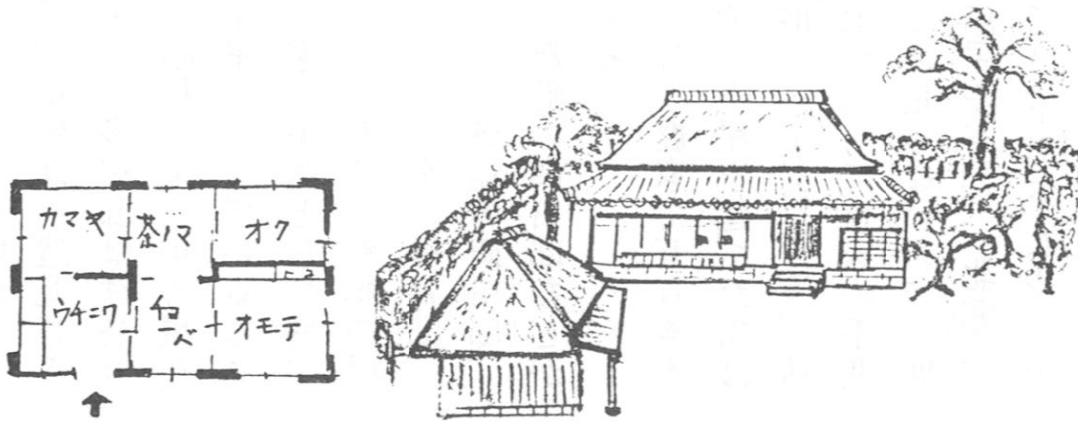
天正の頃、細川家の部将鴨島六之進が、鴨島本郷のいじ川南岸に壘を築き、乗島入道来心も喜來乗島の吉野川南岸に壘を築いて、配地の根拠地としていたので、強固な建物を建てていたと思われる。

※側面図……鴨島町でもっとも多い流れ造り様式



鴨島八幡神社

### 3、農家の建物



本百姓の家姿とまどり

昔、農家は殆んど草屋で、草屋は大工が木材で家の骨組みをし、屋根は垂木に丸竹を横に縄でしばりつける。その上に下方から上方へ麦藁を重ね、そのもとを細丸竹でおさえ、垂木にしばりつけて葺いていく。藁が落ちたり風に吹き飛ばされたりしないようにし、屋根の形に合うように、大ハサミで藁先を刈る。更に刈り後を屋根たたきで刈先をたたいて形を整えながら、藁を積み重ね、屋根の頂上には、山形の大きな瓦を伏せて葺き終りの始末をした。

草屋の屋根葺きは麦藁を多く使ったが、川辺の家は葦を、山をもつ家は茅を使った。麦藁の屋根は五年毎、葦や茅の屋根は三十年毎に葺き替えが必要であった。

昭和三十年頃から、草屋根をトタンで覆うのが流行し、耐久年数は長くなった。

西麻植 河野芳夫氏宅



西麻植 河野芳夫氏宅

昭和四十年頃からビール麦を作る家が多くなり、麦藁の生産がへった。農家の経済も豊かになったので、草屋は木造瓦葺き、入母屋二階屋に建て変えられたのが多い。その頃、喜来の本村邸、坂本邸、上下島の下島多田邸は鉄筋コンクリート建てに改築された。

昭和五十九年の現在、草屋を残している家は、旧家の象徴として残っている家で、殿郷の戸田邸、喜来の藤井邸、上下島呉島の岡田邸、南新町の岡田邸などがある。

昔、農家で瓦葺き木造二階屋を建てた家は、地主や大百姓で、耕地が広くて自家の手間では足りないので、鹿島屋や本司、北司、では下男下女や十余人の奉公人を使っていた。



中尾一元氏邸

壮大な瓦ぶき 2階建ての家々



岡本 有氏邸



川真田 哲哉氏邸



藤川病院(元佐渡氏邸)



中尾 英一氏邸

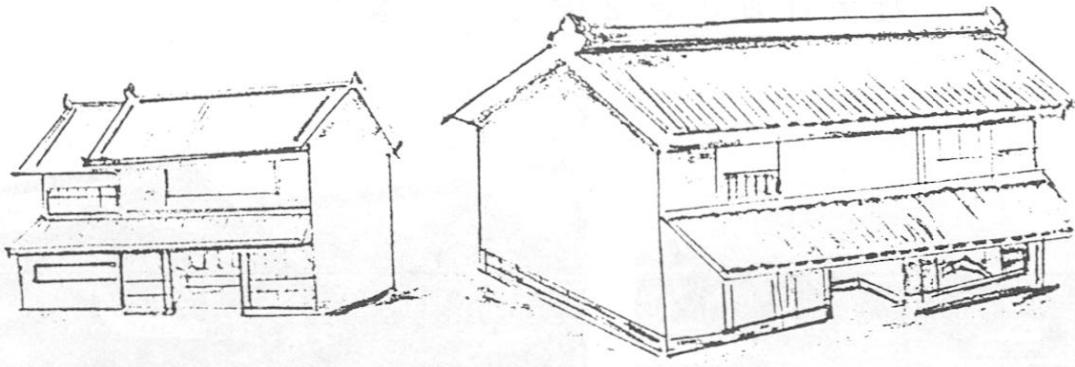


武智 邸



花 榊 邸

## 4、町家の建物



町家の建物の

千年位前と思われるが、肥沃な鴨島付近の高洲に農家が定着し、自給自足の生活をしたことだろう。やがて支配者が配され、吉野川に堤防を築き水害を防ぐようになる。人口も戸数も耕地も増加してきて、生活必需品を手近かに求めるのは当然で、土地が高くて広い旧県道の町筋へ店が建ちだした。藩政の末頃には、鹿島屋や本刃ほんばのような壮大な瓦葺き二階屋が建ちだした。

明治には次のようだった。  
 ・武智酒造、乾雑貨店、鴨島村役場、鴨島警察官駐在所、大池桶屋、藤田屋うどん店、川田石屋、三倉人力車、あずまや菓子店、山平酒造所、くつわ雑貨店、大谷屋魚店、上村屋薬店、黒田散髪屋、あずまや仕立屋、中野下駄店、け

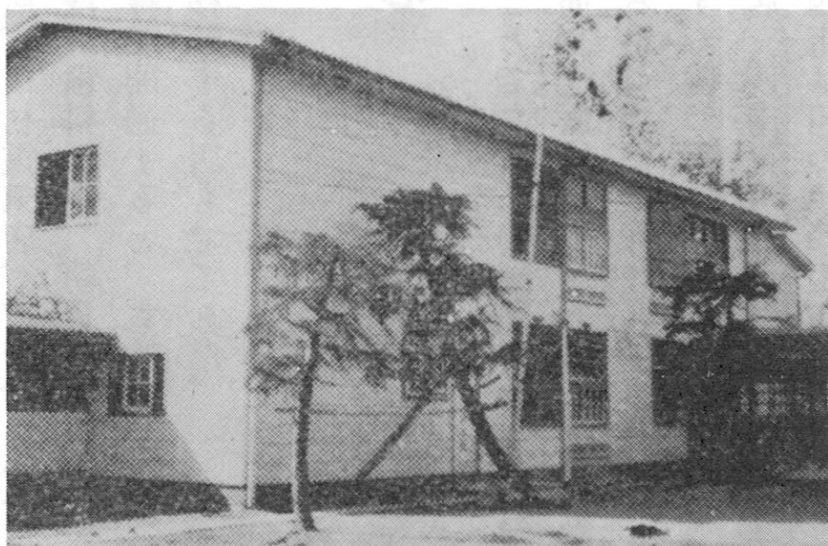


旧鴨島町役場

んどや旅宿、長江魚店、瀬尾自転車店、鴨島郵便局、油屋呉服店、佐渡繭買所、松浦繭買所、志摩書店、魚屋質舗、渋市医院、大久保薬店、筒井精米所、北井ブリキ屋、松島旅宿、豊島屋旅館、筒井焼酎店、べかこや玩具店、田村写真屋、ひょうたん屋百貨店、鈴木蚕種、岸田陶器店、渡部綿打所、福島屋食堂、朝倉醬油店等が建てられた。中には草屋の店もあった。

その後、商家の変転が続き、現今では鹿島屋かしまや、五軒の中四軒うちはそのまま続き、次のように軒をつらねている。

四国電力、高島屋京染店、瀬尾自転車店、石原米店、赤枝医院、和田齒科医院、阿部洋品店、三倉屋会館、中山肉店、赤枝履物店、ミドリヤ化粧品店、黒田薬局、片山スポーツ店、石原小児科医院、本町郵便局、油屋電気店、石原玩具店、びつくり食堂、藤川産婦人科病院、志摩書店、川真田薬店、トーコー衣料店、北井洋服店、松島毛糸店、奥本金物店、藤井文具店、筒井酒店、



協 同 病 院



鴨 島 本 町 郵 便 局

松島呉服店、ひょうたん屋雜貨店、川村電気店、河野パーマ、森横履物店、柳川時計店、大戸井釣具店、戸井食料品店、岸田化粧品店、浅野歯科医院、朝倉醬油店、後藤薬店、鴨島燃料など。

昭和三十四年、国道一九二号線が開通すると、家並みがぎっしり詰って、駐車場をつくる余地が少ない鴨島町筋の店舗は、国道筋へ移転する店もでてきた。

## 5、昔の鴨島繁華の中心

明治中期から大正中中期までのことである。鴨島駅前の中中央道路が通っていなかった頃は、駅の西側の旭通りより八幡通り、上下島を通り、飯尾中央へ通ずる道は重要な道路であった。

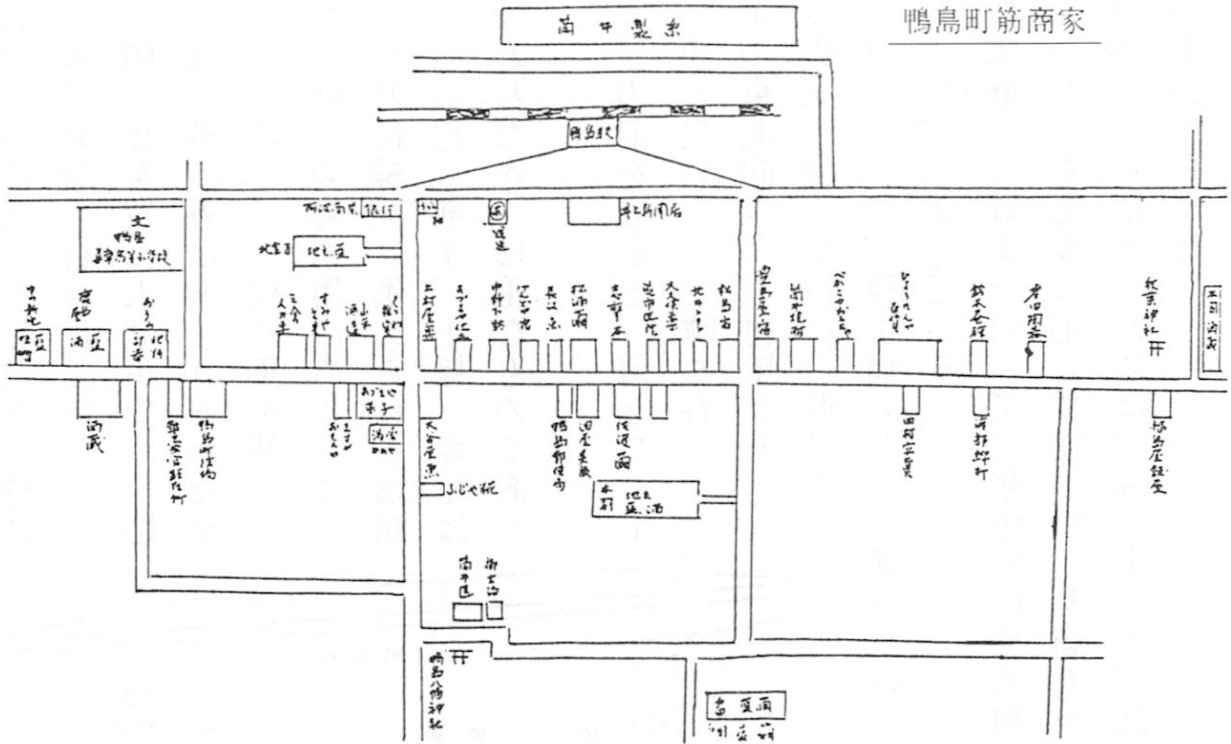
また、鴨島の町を東西に通ずる県道は、今も昔も重要な道路である。

重要な南北道と東西道が交叉する四つ辻は、明治、大正の頃、鴨島繁華の大中心地だった。

四つ辻の南西角には東屋菓子店、西南東角は大谷屋魚店、北西角は日用品、荒物店のくつわ、北東角は薬店の上村屋があった。この四店は四つ辻に相向って店を構え、いずれも隆昌で品物も沢山置き、客の出入りも多く、商業鴨島の繁華の中心であった。

東屋は瓦葺平屋であったが、間口は十二米位あった。店の入口の横にはしだれ腐、蓮根、コンニャクを入れた壺が並べられ、葬儀や法事にはなくてはならないものが、この店だけに置かれていた。町筋の軒下の縁側には長いコンロが置かれ、木炭やコークスが火焰を立てて、煎餅焼器がかけられ、四、五人の職人が並んで、忙しく煎餅や池の月、小判菓子、白麦、黒麦、文菓子を製造していて、その前を通ると、甘くてこうばしい香りが鼻を楽しませた。

明治末頃  
鴨島町筋商家



店の中には色々な菓子が並べられ、饅頭や青貝餅、餅菓子なども造られていた。

店の東側の道に沿って、深い大谷焼の甕が十箇位並べられてあった。これは葬式の時、屍体を入れて土葬するのに使った。甕がへっているのを見ると、さびしい感じがした。

この東屋は店員も忙しく動いており、出入りの客も続き活気に満ちていた。

東屋の北向きは「くつわ」で、店は広くないが、上から吊るされたものもあり、米麦も売っていた。客の出入りはたえ間なく活気に満ちていた。この店はかよい帖を沢山だして、かよい帖をもった客は、現金をもたずに買い物をして、盆、節季に支払ったものである。

東屋の東向きに、瓦葺き二階建ての大きな構えの大谷屋があった。この家は魚屋で、出窓の料理台は二米巾もある青石で、そこに厚くて長いまな板が置かれ、長い庖丁で刺身をつくっているのをよく見た。料理台には鯛や鰻、はも等が並べてあったが、土間に大きな腹白がおかれていることもあった。

婚禮などの仕出しをしたり、時には裏座敷で宴会も行われていた。

この頃、魚を買う人は少なく、婚礼や来客の時以外はあまり使わなかった。一年の中で一般に魚を使うのは祭礼の時、姿寿司用のあじ、このしろ、正月に神棚に供えられる塩鰯位で、その他、煎子、干鰯、塩鯖は時々使われたが、珍重なものであった。

大谷屋の前を通ると、何となく生々しい魚の臭いがして唾を呑んだ。

東屋の東北向きに上村屋があつて、色々な売薬を売っていた。町で薬店は一軒だったので、腹を痛めたり、風をひいたりした時は、上村屋へ走った。中將湯の絵看板が掲げられてあったのを覚えている。

一般家庭では置薬といつて、越中富山や大和奈良の商人が腹薬、風邪薬、頭痛薬、虫下し、傷薬を預けておいたのを必要に応じて使った。薬商人が年二回集金と薬の入れ替えにきたものである。

東屋の四つ角にあつた店は、みな大きく、品物は多く、客の出入りも絶えず、にぎやかな所で、鴨島繁華の中心であつた。



鴨島駅前

## 6、建物の変動の著しい地区

### (1) 旭 通 り

旭通りから南へ、南新町、上下島、飯尾中央へ通ずる道は、南北道路の要路であった。昔は飯尾川を越して直通する道はなく、飯尾川の北岸を西へ通り、石橋を渡って唐人からうじんから南県道へ出ていた。この道は古いだけに、沿道には旧家が多い。北から鴨島では、地主で藍商かんばんの北刃、地主のかめ屋、庄屋のふるま、農家の令ひょうた、黒住教会所、数代続く筒井医院、八幡神社、△、豆腐屋があつて、上下島では大農家の令ひょうた、大農家の出店、庄屋の上力じょうりき、大農家の野木両家があり、飯尾では、旧家の北店、雑貨店の角安かどやす、旧家の石いしがあつたが、今も続いている家が多い。

昭和三十二年、鴨島駅が開設されると、この道の往来も繁くなつた。駅前の広場の南には井上新聞店、その西に運送店まるあが建ち、その西から南へ通つた道の沿道には北から、志摩商店、平田うどん屋、木下散髪屋、瀬尾陶器店、蔭山豆腐屋、くつわ雑貨店、上村屋薬店、大谷屋魚屋、あずまや菓子店、かめや湯屋、川真田煙草屋などが開かれた。

大正になると、北から阿波商業銀行、上田医院、かわちや菓子店、松の湯、志摩紙店、日の出製糸などが建つた。

この頃、飯尾川に橋がかかり、交通が便利になると、幾多の店舗や住宅が建てられたが、上下島から飯尾の間には店舗は少なく、



鴨島町役場

住宅がふえた。

この道筋の繁栄は長く続いたが、昭和四十二年、駅前中央道路が開通してからは、そちらに繁栄を奪われた。

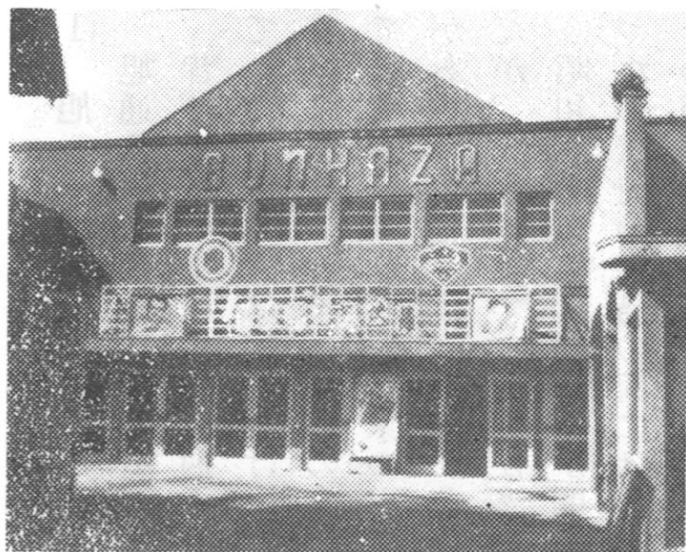
## (2) 銀座通り

今の銀座通りは、昔からあった道路であるが、明治の頃には、南入口の西側に三階の松葉旅宿、東側に豊島屋旅館てしまやがあつて、北へ岸田髪結屋、筒井農家、日野石屋があつた程度だった。

人家は少なく、大正末頃まで持部鉦山の鉦石を運ぶ牛車の通り路で、路には鉦石の粉がこぼれてきらきら光っていた。

大正十二年、文化座が開設されると、観覧客や製糸工女連の出入りが多くなり、店舗も建ちはじめ、北に四国銀行が開設されるようになった。そして終戦後からも急速に発展した。

現在、銀座通りはその名の通り、鴨島での繁華街と



文化座



阿波商業銀行

なっている。

### (3) 新 国 道 筋

従来、徳島へ通ずる国道はせまくて、曲りが多く、バスがようやく通れる程度であった。自動車交通の時代に入り、昭和三十四年、国道一九二号線が開通した。

新国道は四国四県の県庁所在地を結ぶ道路で、路面も広くて補装され、交通も頻繁ひんぱんなので、この道路ぞいに新時代を予見して、駐車場を備えた大規模の店舗や工場が建てられだし、鉄筋コンクリートの高層建築も次第にふえつつある。

商況も活発であり、将来繁華の中心として発展することは明白である。

### (4) 中 央 橋 通 り

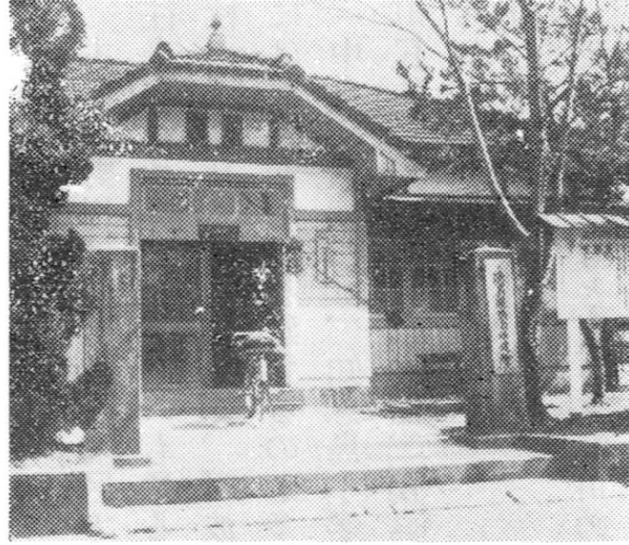
古来吉野川は、鴨島と北区との交通を不便にしていた。昭和二十八年、この川に中央橋が完成すると往来が便利になり、バスも通るようになって、北地より買い物にくる人、鴨島駅へくる人、鴨島商業高校や川島高校へくる生徒、阿波高校や阿北高校へ行く生徒など、南北の交通が繁くなると、中央橋通りには住居や店舗を建てるのが多くなった。

中央橋通りには、知恵島小学校や武智酒造は、早くから建てられていたが、あらたに鴨島第一中学校、町民体育館、中央公民館、鴨島職業安定所、鴨島自動車学校、美馬病院、消防署、など公的施設が建てられ、発展しつつある。

### (5) 新 開 地

新開地は、もともと吉野川の流れと川原で、人家はなかった。

明治の末、吉野川がせかれて、その流域は陸地となった。この土地が新開地で、人の住む所となった。大正十二年には、鴨島公園が開かれ、その一部に昭和八年七月十六日にはプールが設けられ、公園入



旧 保 健 所

口の前通りに人家が建ちはじめた。広い敷地を要する製糸工場も建てられた。昭和十二年には体練場が設けられた。

昭和二十八年、中央橋通りが新開地を貫通すると、新開地に新興の気分が横溢おおいっして、人家の増加を促進した。もと吉野川南岸の堤防跡の道路ぞいには商家が、北岸の堤防跡の道路ぞいには住宅が急速にふえだした。

昭和三十二年、鴨島商業高校が建てられ、学校付近に住宅や商家が建ちはじめた。

昭和五十四年、鉄筋コンクリート五階建ての中央公民館が建てられ、人家は増加の速度をましている。

#### (6) 駅前中央通り

鴨島駅前から南の山麓の呉郷団地へ向かう中央通りが出現するまで、ここは旭通りと銀座通りとの間にある裏地で、大通りになりになるとは思いもよらなかった。

昭和四十二年頃、この大通りが開かれると、将来の発展を見通して、争って店舗を建ちはじめ、今では鉄筋コンクリート建ての高層ビルも現われている。

中央通りは、南へ広がりつつある鴨島の中央街として、名のように発展しつつある。

#### ※ 思い出座談

由良 片山スポーツ店のあたりに、綿打屋があって、前を通るたびにビーンビーンと音がしていました。

真先 あれは手で糸をこしらえていたんでよ。昔は自分で着物をつくっていましたから。駅前には鶴亀の旅

館がありました。私の結婚式はそこでしました。

由良 牧野の藤もきれいでした。

真先 広場が拡張されても、牧野、双葉が当時からいた人ですよ。

## 7、思い出の建物

### (1) 駅前井上新聞店

明治三十二年、私設の徳島鉄道が開通し、副社長の川真田徳三郎氏宅の東北百米イートルに、鴨島駅が開設された。

駅前は今よりせまいが、広場があつて、南のふちに、駅に向かって平屋に見えるが、実は瓦葺き二階屋の井上新聞店があつた。駅前広場は地上げてあつたので、店は二米位イートル低い所に二階屋を建て、二階の床は広場の高さに合わせて造り、店として人の出入りを便利にしていた。

この店は徳島毎日新聞や大阪朝日新聞のほか、菓子や飲み物を売っていた。鴨島唯一の新聞店であり、駅前唯一の菓子店であつたので繁昌イートルしていた。

店の北前に、東西十米イートル、南北五米位の藤棚を作り、その下に縁台を据え、その上に焼物の角い水盤を置き、夏には水を入れて、ラムネやみかん水のビンを水につけ、冷やして売っていた。藤棚の蔭でラムネを飲むのは涼しかった。

水盤から噴水管を垂らして、噴水で人形がカンカンと太鼓を打っていて、見る人を楽しませた。

大正になって、自転車が出はじめると、駅まで自転車で乗り着けた人は、自転車を藤棚の下へ置かせ

て貰っていた。預け料はとらなかった。

井上店は後に牧野氏の手に移ったが、昭和四十二年、駅前から南へ中央通りが開通した時、取りのけられて今はない。

## (2) 川真田徳三郎氏邸

旭通り西側中程に、豪華な川真田徳三郎氏の邸宅があった。

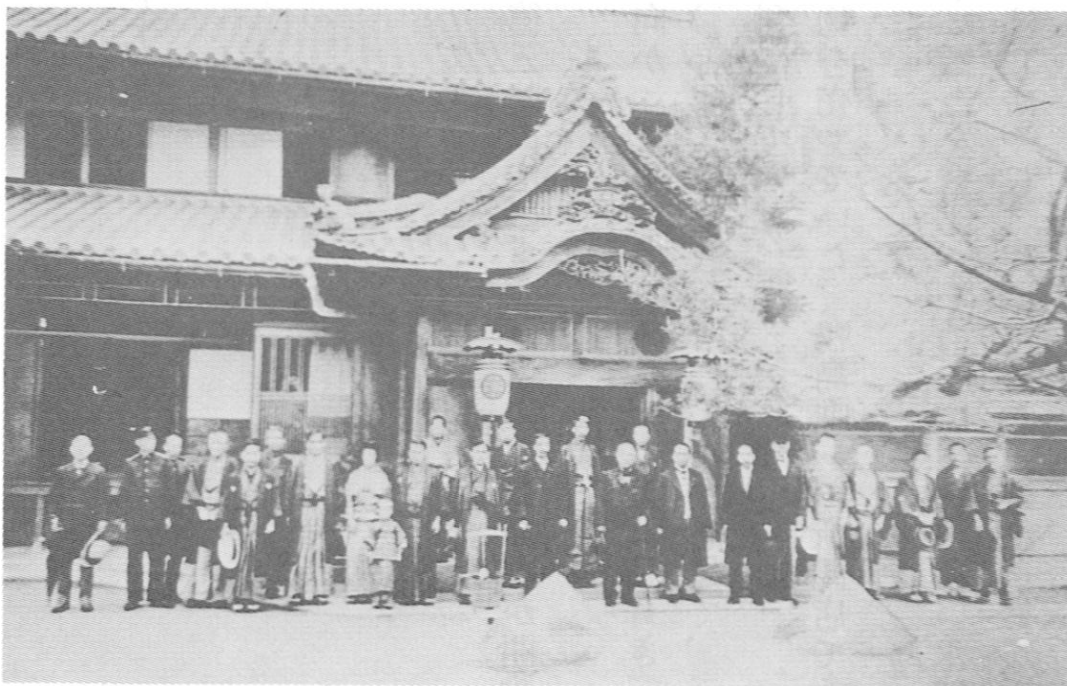
川真田家は、本<sup>かみまへ</sup>より分家し、大地主として、藍商として、後には大地主として栄えていた。

三代目徳三郎氏は偉大な人物で、容姿沈着、風体巖然とし、人柄の尋常でないことをあらわしていた。

明治二十年には本家の川真田市兵衛氏と協力して、阿波国共同汽船会社を起し、明治二十三年、鴨島ではじめて衆議院議員に選ばれ、明治三十二年には私鉄徳島鉄道を創め、副社長となり、鴨島駅まで鉄道を敷いた。

明治三十五年頃は全盛期で、氏は豪邸を建てようとし、穴吹町から宮大工の吉坂常右衛門を呼んで建築に当らせた。

常右衛門は長男の清十郎氏と共に、桧や櫟の良材を集め、建築にかかったが、日露戦争が起ったので工事を中止した。翌年、戦争が終ったので、再び工事をはじめ、



神殿造りの川真田徳三郎氏邸

鴨島では最初であり最後である豪壮華麗な邸宅を建てた。

この建築は、特上の材木や別誂あつらえの瓦を用い、各所の彫刻は常右衛門氏と清十郎氏がノミをふるった。東向きの立派な長屋門を入ると、南向きに瓦葺き木造二階屋の居宅があつて、東と北裏に土蔵、西と南に寢床を配し、表庭の松が太く長い枝を内庭にのぼし、見事なかぶり松であつた。

この豪邸は、北か方の邸として、輪換りんかんの美を誇っていたが、昭和七年頃、失火して惜しくも焼失した。

### (3) 川真田市兵衛氏邸

川真田市兵衛氏の邸宅は、本郷のいじ川の南岸にあつた。藩政末期から鴨島第一の素封家で、七十ヘクタールの耕地を小作に出し、藍商として勢力をもっていた。酒造業も行っていた。

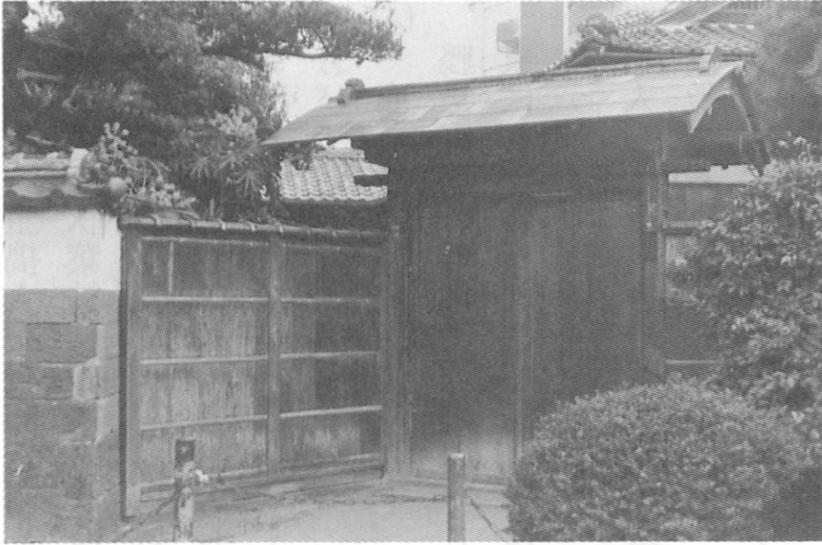
市兵衛氏は、天保八年の生まれで、重厚な顔付きで、背も高く、大旦那の風格があつて、川真田家では傑出した人物であつた。

明治二十年、阿波国共同汽船会社を起し、初代の社長となつた。明治三十一年には衆議院議員に選ばれた。

川真田家の邸宅は、明治初年に改築されたもので、間口が十六米、瓦葺き木造切妻の二階屋で壮大であつた。

屋敷は東に長屋門があつて、門を入ると南向きの住宅があつた。北裏に裏座敷、その西に続いて土蔵が三棟、西側には間口二十米の寢床が二棟、南側には物置きが続き、建物の内側は内庭となり、作物の調整や干し場に使っていた。

西側の寢床は藍葉の寝せ場で、寢床のおぶたは広くて、冬には



本カネマン (裏門と塀)

五十人位の玉搗人が玉臼を据えて杵で搗いていた。

酒造蔵は秋葉神社の東隣りにあったが、鴨島の大火で焼失した。

昭和二十二年八月、川真田氏の住宅に麻植協同病院が開設され、次第に拡張され、昭和五十年頃には、川真田家の建物は殆んど撤去して、鉄筋コンクリート三階建ての病院となった。

今は、隠居所と裏座敷を残すのみで、前の大邸宅の面影はなくなって寂しいが、大病院が建って活気をおびている。

#### (4) 鹿島屋の屋敷街

鴨島町筋の西部大西郷に、昔からの素封家鹿島屋一統の屋敷が道の両側に続いていた。

東におうら、次に本家、次に中の新宅、続いて大西、おにしと西へ続いていた。

おうらは、鹿島屋の分家で、昭和十年頃まで建材、太物、肥料、度量衡器の商業を営んでいた。長屋門を入ると南向きの瓦葺き木造切妻の二階屋の住居があつて、東に寢床、北裏に土蔵、西に寢床を配した屋敷である。

鹿島屋本家は、藩政中頃より大地主、藍商、酒造、味噌製造で栄えてきた。味噌製造は中の新宅を分家する時、贈った。

住宅は、今も町筋の近くに南向きにたっている。前には住宅西に長屋門があつた。門を入ると、東に瓦葺き木造二階建ての住宅があつて、西には二階建て寢床を配し、北奥には間口二十米もある二階建て土蔵を構えている。

昔は屋敷のほかにも三ヶ所の寢床をもち、藍葉を寝かせて藍玉を搗いていたとのことである。道をはさんで南側にも大きな酒蔵があつた。

このように、本家は構えも壮大で、事業もさかんな家であつた。



川 真 田 本 家

本家の西に続いて中の新宅がある。この家も地主で、味噌製造を営み、鹿島屋味噌は有名で、昭和四十年頃まで町内外に需要が多かった。

中の新宅も長屋門を構え、南向きの瓦葺き木造切妻の二階屋で、北に二棟の二階建て土蔵を、西に間口五十米の二階建て寢床を構えている。屋敷の南に道をへだてて広い庭をもち、庭の南には長い平屋の寢床があつて、庭では農作業をしていた。その西に大きな味噌蔵があつて、味噌の製造、販売を営んでいた。歴代の中でも、治助氏と省三氏は在郷軍人鴨島分会長を勤め、省三氏は軍友会長を勤めていた。

中の新宅の味噌蔵から道をへだてて北側に、南向きの大西がある。

南向きの間口十四米（イナ）の瓦葺き木造切妻二階屋と、裏に土蔵、西に二階建て寢床を構えている。この家は明治初年の分家で、藍商と金貸しを営んでいた。代々まじめな人柄で、鹿太郎氏は鴨島町長を勤めた。

おにしは、大西の西百米（イナ）にあつた。県道の南側にあつて、門は県道に面し、住宅は間口二十米（イナ）の瓦葺き木造切妻の二階屋で、南向きの大きくすっきりした家で

あった。

住宅の西北に二階建て土蔵、西に二階建て寢床を配し、南前は広い庭で、屋敷の周囲は木柵を回らせていた。この家は、農業を営んでいた。

おにし歴代の中でも、幾三郎氏は人品勝れた方で、明治末頃学務委員を勤めていた。

この鹿島屋の本家、分家のおうら、中の新宅、大西、おにしは、県道の北側と南側に家を構え、三百米イムルにわたる屋敷街を形成し、昔は盛大に事業をしていたが、今はおうら、本家、中の新宅、大西の北側屋敷だけを残し、職業も変っている。



門



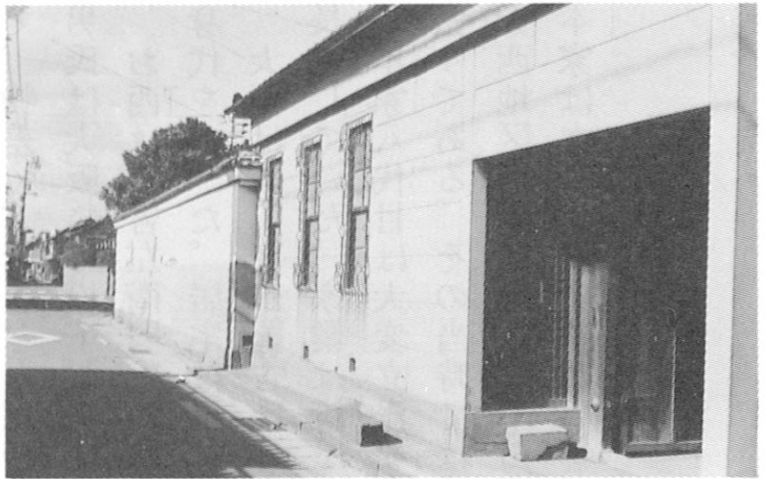
中門



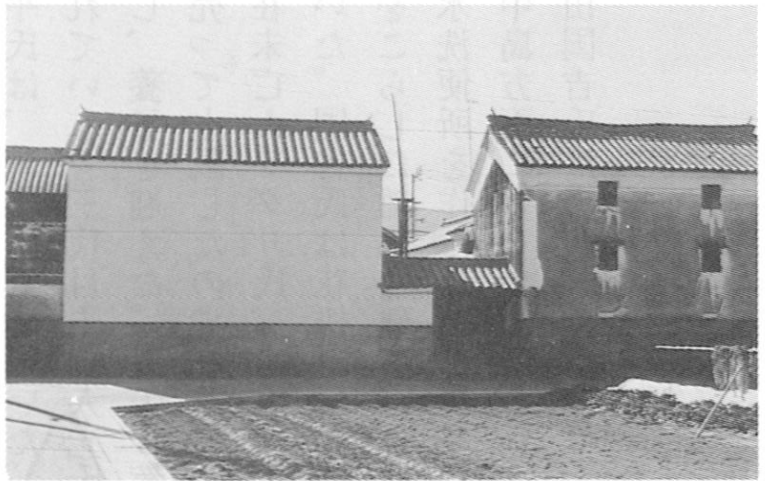
寢床



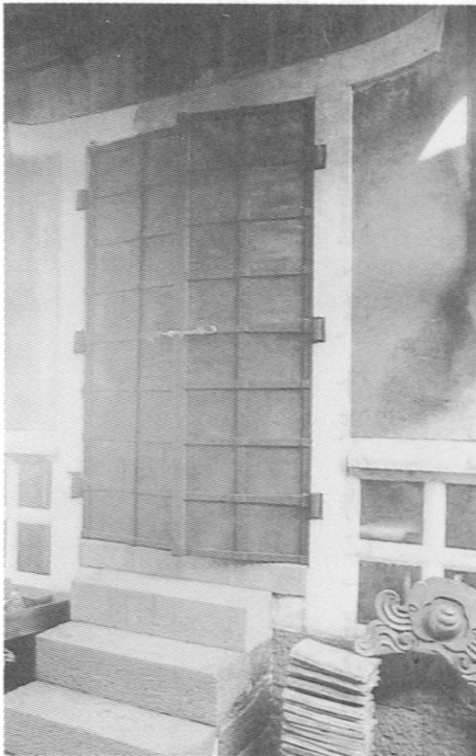
つるべ



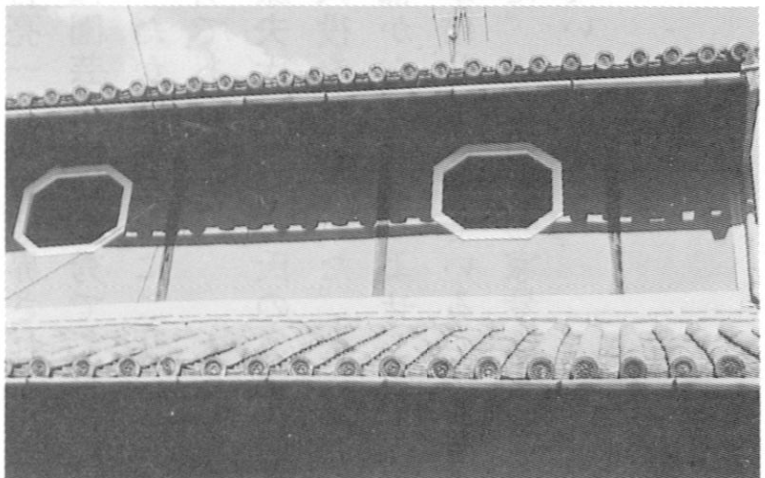
へい



いくつもの蔵が並ぶ



蔵のとびら



趣好をこらした窓

(5) 川真田本家こぼれ話

和 田 芳

川真田本家六代目与左衛門氏は、中々立派な方であったとか。そして一族を、お裏、鹿島屋、大西、お西と分家をした。本家は味噌屋、質屋、酒屋、藍商をしていたので、寝床も七棟あったとか。七代目吉左衛門氏、八代目恒平氏、九代目素平氏、十代目聖郎氏、鹿島屋へは、分家の時に一年分の味噌醤油の原料、道具をおくったと聞く。

お裏は吉左衛門氏の弟、定三郎氏を分家とした。塩、木綿、肥料の商買をした。二代目忠平氏になって、物差し、杵なども売った。忠平氏は、漢字に秀でていた。三代目亮一郎氏も他界され、現当主の幸男氏は大阪にて松下電気に勤められている。三代目未亡人光氏は各種園芸、墨絵に秀でておられる。

お西は、吉左衛門氏の妹を分家し、養子を迎えた。養子は教師だったが囲碁などにこり、一代切りで身代を失った。居宅は馬越酒店へ売って上阪したので、その後は不明である。

大西は故川真田国吉氏の家、現在未亡人ワグリ氏、当主は川真田康夫氏で、国吉氏の父に当る人は町長をしていた。家業は粉屋もしていた。国吉氏は花拵町長の時町収入役をされていた。

本家八代目は大変立派な方で粹をこらした離屋はなれを建てられた。京都から瓦を取りよせ、床下はタイル張りである。その当時では珍しい水洗便所を作られた。現在若松氏が借りて住んでいる。川真田家は、大西地区、本郷地区、千田須賀、中島方面に多くの土地をもっていた。川真田家の家号は、お裏は一介、本家は本介、鹿島屋は中介、川真田国吉氏は大西介で西介はつぶれている。

(6) 夜の歓楽街の秘話

(イ) 旅館料理の豊島屋、西洋料理のミカド

鴨島第一と古くから定評のある料理旅館、豊島屋（通称てしまや）は、菊の名声とともに鴨島の名物だった。客を外らさぬ久子、政子、百合子、初子のかゆい所へ手の届くような応対は、調理の岡常さんの冴えた腕と共に客を喜ばせてくれた。招けば奴の梅香、奴の両紅さんが手取りながら芸を披露してくれる。

ミカドは西洋料理の部門で、米田幸雄さん外二名の調理も味は百パーセントのグルメ気分である。客をとりもつ君子、米子、静子、初子、禮子、ヨシ子と粒を揃えたウエートレスに、客足も「アラヨイショ」と、これまたイロも百パーセントの歓楽境であったとか。

(ロ) 近代色の尖端、「ニコニコ」

カクテルグラスがテーブルに踊る、「お、ジャズだ。」夜の鴨島を彩るモダニズムは、カフェーからと、その一流の名辱<sup>はずか</sup>しめぬ「ニコニコ食堂」の気分は酒の陶酔者達をなんと喜ばすことよ。街の洋館ニコニコのカーテンをくぐらぬ者は、鴨島の近代色を語る資格なしとあって、銀座には客足が絶えない。これを取持つ物言う花の名は、君子、とし子、葉子、栄子、たえ子と揃った愛嬌者。いそいと鼻の下が長い殿方がかよったことよ。

全くの余談であるが、昔のことを聞いたり、調べたりしていると、ボロもでるものだ。当時いそいそと通った殿方も奥さんも、既に故人となられたので書かせてもらう。森藤の大久保氏もその一人で、お気に入りが出てきて、相当の資金を遣い果たしたそう。現在高校で教鞭をとられている御子息にお聞きすると、「まちがいない事実です。」とのことだった。亀屋の大先生もかよわれたとか。浦島武一氏に

よれば、私の養祖父も相当かよっていたらしい。しかし生前に聞いたことによると「私は真面目であった」と話された。亀屋の大先生も「僕もまじめでした。どうも」と話してくれた。誰れもが、目で合図されていたような気がする。

いずれにしても、ミカド、ニコニコは、鴨島の夜の歓楽街の代表として、時代をリードしたことは確かである。

尚、豊島屋は老舗であって、今の藤井文具店の位置にあった。おかみは町婦人会、町の行事の一役の花を咲かせる活動をした記録も残されている。

参考資料「徳島日々新聞 昭和五年」

#### (7) 初めての鉄筋コンクリート建「上田医院」

旭通り南東側に梶本外科がある。この建て物は、終戦後、鴨島兄弟教会のジャマニー牧師が借りていて、次に徳島相互銀行が借りて営業していたこともある。

この建て物は昭和七年頃、上田幸医師が建てたもので、モルタル塗洋風建築で、セメントを使ったものとしては鴨島で最初である。この建築の施工は、松本真五郎氏が当られた。その当時、千両普請といって、立派な木造家屋が千円で建てられた時代だったが、一万円かかったとのことである。

上田医師は、鴨島で初めてオートバイを乗り回し、医療に奔走した。鴨島では初めて電気冷蔵庫を備え、修理には大阪から人を呼んだといわれている。

上田幸医師の父は、越前金沢で前田侯の藩士であったが、廃藩置県となり、浪人し、職をさがすうちに、徳島県の巡查募集に応じ、採用され、牛島へ赴任した。後に上浦小学校の教員を勤めていたが、白山と号して書をよくした。

幸氏は三村高等小学校を卒業したが、学資の都合で上級学校へ進めなかった。しかし、幸氏は医師



はじめての鉄筋 (元 上田医院)

## 8、鴨島東部の官公庁団体街

### (1) 駅東より文楽通りまで

鴨島旧県道町筋の東部、秋葉神社の西五十米メートルに、南北に中町、一番町、栄町、本郷、殿郷を通り、飯尾、三谷に通ずる道路である。

この道筋は、昔から人家が少なく、沿道には畑が拡がり、商業には向かないが、大きな施設が設けられる余裕のある地域であった。

道の北端駅東、鉄道に向かう所に、昭和二十九年、元大久保医院出張所、現牧野医院が開かれ、内科

を志し、自学に励み、医師の第一期試験に合格した。

徳島の四十三聯隊に入隊して、医務の補助員をしていたが、そのうちに第二期試験にも合格し、実地修業もして医師の資格をとった。除隊して池田町の回生病院に勤めているうち、大正七年、インフルエンザが大流行した時、鴨島に病院を開き、医療に従事した。

昭和七年、鉄筋コンクリート建ての病院を開いて栄えたが、昭和十年、オートバイにて走行中、不運にも事故に遭い、惜しくも逝去された。



(2) 文楽通りより県道まで

鴨島農協支部より文楽通りを越えて、十米南に、昭和二十四年頃、有楽座が開かれ演劇を上演し、後には、映画を上映し、観客を楽しませた。その後、パチンコ店を営んでいた。

昭和二十八年には、その東北向きに文楽通りに沿って、東宝劇場が設けられ、昭和五十八年まで映画を上映し、人々を楽しませていた。テレビの普及に押されて閉館してしまい、今は、有楽座も東宝劇場もなくなり、その跡は駐車場になっている。

東宝劇場の南十五米に、昭和二十四年から近藤歯科医院が開かれていて、歯の治療に当たっている。

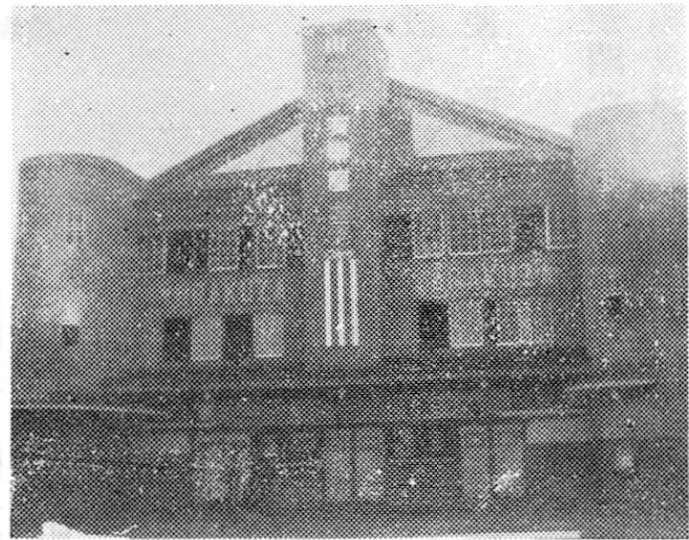
近藤歯科医院の西向きに、昭和二十四年から鴨島編物女学院が開かれ、女性に編み物の技術指導と、花嫁教養に活動していたが、昭和五十八年より廃止した。

(3) 県道より役場前通りまで

鴨島編物女学院より県道を越えて東側に、大正十年頃よりキリスト教の礼拝所としての施設から、筒井家の熱心な信仰によって教会堂を建立した。日本キリスト教団鴨島兄弟教会がある。この教会へは信者ばかりでなく、一般の人々も礼拝や教養の場として集るのを楽しみにしている。

教会の南隣りに大正十年、鴨島幼稚園として、めぐまれた環境、きまりあるしつけ、豊かな情操をモットーとして、町内外の幼児教育に貢献してきた現めぐみ幼稚園がある。

めぐみ幼稚園の南に、大正七年、鴨島裁縫女学校として、現在は森学園となり、和洋裁の技能、女性



ありし日の有楽座



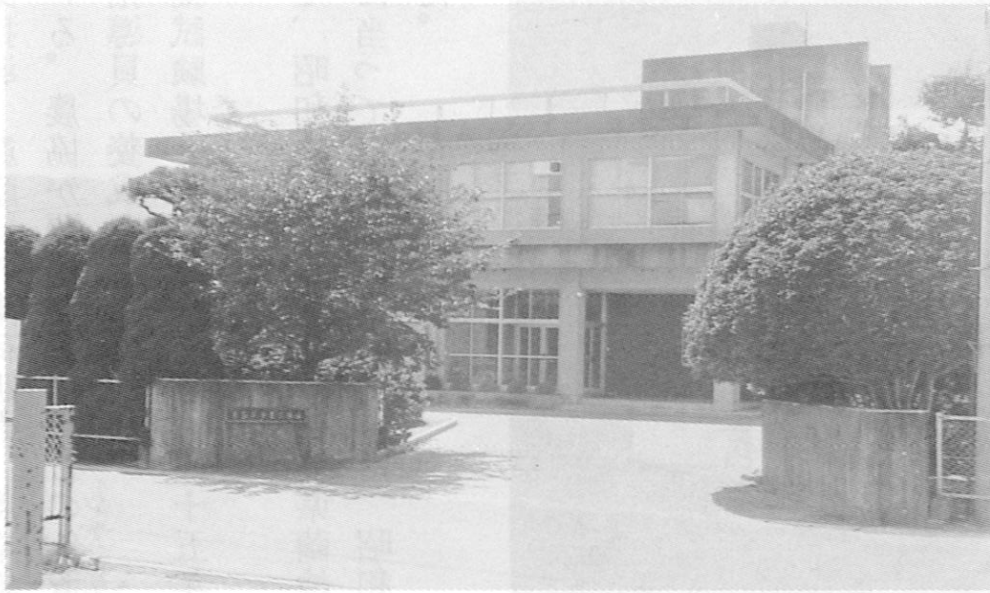
(5) 国道より南

国道を越すと、道の東側に、昭和四十七年開かれた徳島県信用農協連鴨島支所があって、農業協同組合の金融貯金に関する指導監督を行っている。

信用農協連の南に、

徳島県鴨島保健所がある。保健所は、昭和二十年新開地に開所していたが、昭和二十六年現在地に移された。麻植郡、阿波郡の各町村及び板野郡内の上板町、吉野町、土成町を管内として、衛生思想の普及向上、食品衛生、環境公害、保健予防などの業務を行っている。

保健所の南に接して、昭和四十五年開設された鴨島農業協同組合がある。この組合では、



蚕業試験場

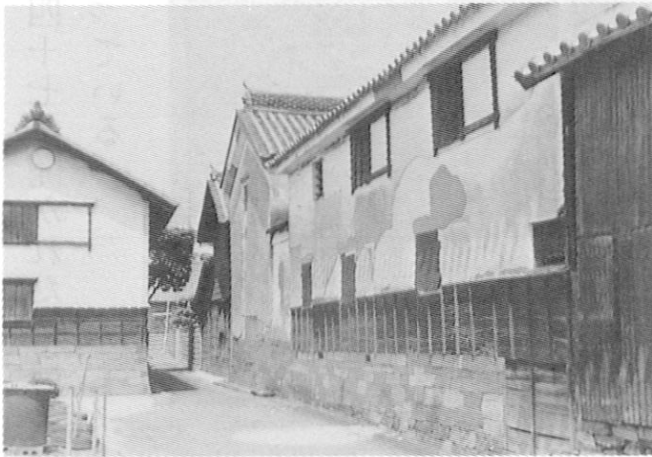
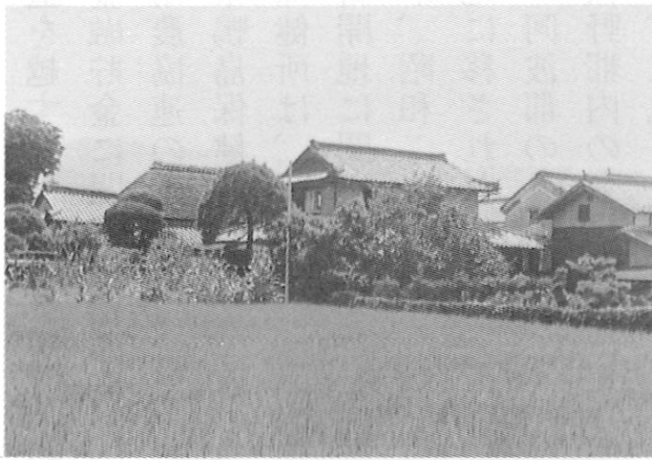


繭検定所

組合員を対象としての農業指導、農産物の集荷販売、農業施設への金融、貯金、建物生命の保険、肥料食品などの販売を行っている。農協が開かれる前、この位置に、大正八年原蚕種製造所が設置され、裁桑、養蚕、病理の研究、指導員の養成を行っていた。

大正十一年、徳島県蚕業試験場と改称され、昭和四十五年、道路の西向きへ近代的な庁舎を建て、移転し、業務を行っている。

蚕業試験場の南に接して、昭和八年設置された徳島県繭検定所があつて、繭の検定を行っている。この検定は、繭の取り引きに当って、随意に行っていた。昭和十五年よりは、法によって強制的に行われ、繭価を定めるようになった。



元庄屋 戸田邸

# 第九章

## エネルギーと交通の発達

世の中のうつりかわり その2

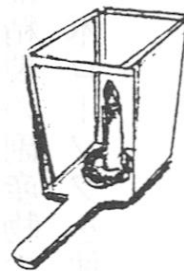
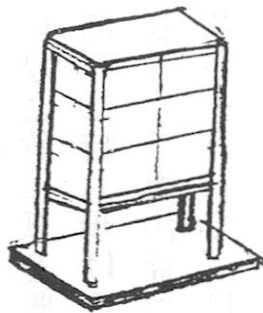
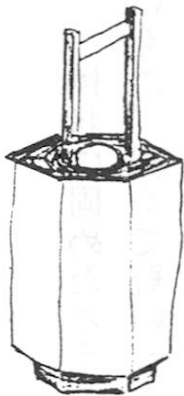


# 第一節 灯りの歴史

## 1、行灯と提灯

明治の中頃までは、どこも同じで、夜の灯りには行灯と提灯を使つた。ローソク行灯は釉薬を施した土製の油皿に、菜種油を入れ、これに灯芯を浸し、端を外に出して火を点す。油皿の周囲は木の骨組に紙を張って囲い、風を防ぐように作ってあった。骨組には円筒形や角形があり、柄をつけて持ち歩けるように作った鉄製の手燭もあつた。祭の時、小型の角行灯に御神燈と書いて軒先に掲げたり、大型の角行灯に御神燈と書いて、神輿の通路の上に高く掲げたりした。また神棚の御神燈や仏壇の御燈明には囲いをつけないで使つた。

菜種油は農家で油菜を栽培し、種を搾って造つた。鴨島では藩政時代から本郷の角屋や本町の油屋で種油を搾っていた。種油は造つた所へも買いに行つたが、行商人が油を壺に入れ、これを天秤棒で担いで家々を回り、枘で一勾、一合とはかつて売り歩くことが多かつた。菜種油は灯用の外、油揚や揚物にも使われた。灯油は胡麻などの種から搾ることもあつた。



ろうそく立て

行 灯

灯芯は藺草りんそうの芯を抜き取ったもので、昭和の初め頃まで、元町のひょうたんやで束にしたものを売っていた。

行灯には木ローソクも使った。木ローソクは櫛はせの木の実から造ったもので、棒状に固めたらうに、紙のこよりを芯にし、底中央に立てる穴をあけてあった。大きさは太くて長いもの、細くて短いものなどいろいろあった。

ローソクは鉄の燭台しょくだいに立てて使うもので、使い方は行灯と似ていた。提灯ちようちんは細いひご竹に紙を張り、ジャバラにして下には燭台を取りつけ、上に口輪をつけ、口輪に柄をつけて夜の明りに持ち歩けるようにしてあった。柄を引き出して長く使えるようにした馬乗提灯うまのりちようちんもあった。また、ジャバラを円筒形にし、折りたたむと懐いへんにも入れられる携帯便利けいたいべんりな小田原提灯もあった。提灯には屋号や苗字を書いて、自分の

存在を示すと共に、持主のしるしにした。

木ローソクは長く使われたが、明治中頃から石油精製の副産物のパラフィンで造った洋ローソクが使われるようになり、木ローソクを使う人は次第に少なくなった。

点火には明治初期までは火打石を使った。火打石はサヌカイトの石に火打金を打ちつけて、火花を起し、蓬よしきから造ったもぐさや蒲がまの穂などから造った火付綿に点火した。その火種を木の削そげに硫黄イオウを付けたつけ木につけて、灯芯やローソクの芯に点火していた。明治中頃にマッチが出現し、点火は便利になった。

ローソクは溶けて流れて、提灯の底に溜たまって火を出したり、倒れて提灯を焼いたりして火事を起こしたこともある。北方かむまの豪邸の火事も、二



ちようちん

階に置き忘れた提灯からの出火だといわれている。

## 2、石油ランプ

明治中頃になると、石油を灯すランプが出たため、行灯やローソクを使うことはだんだん少なくなつた。

ランプは、硝子の壺に芯と硝子のホヤを取付けた口金をのせたもので、芯は太糸を編んだものを使い、振で芯を上げ下げ出来るようにしてあった。ランプには据えて使う台ランプと、釣金をつけて釣り下げて使う釣ランプ、手で提げて歩くカンテラがあった。また小さなランプは神棚にも置かれた。

鴨島駅には大きな釣ランプが使われ、汽車の天井には取付ランプが備えられ、佐渡製糸や筒井製糸には多数の釣ランプが使われ、鴨島の夜は明るくなった。

ランプには反射笠をつけたり、二重ホヤをつけたりしたものがあった。また、外ホヤに色をつけたり、形に細工をして美術的なものもあった。しかし、ランプは油煙がホヤにつくので、毎日拭く手間がかかり、石油の臭いも不快を与えた。ランプの側で長く勉強していると、鼻の中がすすけることもあった。

ランプや石油は旭町南角の「くつわ」や、元町の「ひょうたんや」で売られていた。ランプは明治中頃から昭和初めまで使われていたが、大正七年、電燈がつくようになって、次第に使用が減り、今では骨董品として古美術店に置かれている。



石油ランプ

石油は、サイダー瓶やビール瓶で買いに行った。中には一斗缶かんで買って、吸上げポンプで石油をランプ壺つぼに入れる家もあった。石油缶二つを木箱に入れてしまっていたが、この箱は石たん箱ばこといって机や本箱などによく使われた。石油は、初め頃はせきたんといわれ、石油缶を入れる箱はせきたん箱といわれた。

### 3、ガス 燈

大正初め頃からガス燈が出現した。ガス灯は一ヶ所にガスの噴出孔をつけた鉄製の容器に炭化カルシウム、すなわちカーバイトを入れ、これに水を注いで、アセチレンガスを発生させ、これを孔から噴出させて点火し、燃やして明りを出すものである。このガス燈は明るさは強いが熱が高いのと、悪臭が強いので屋内では使われず、秋葉神社の夜市で露天店やのぞき台の明りに使った。

筒井医師は、自転車のヘッドライトに仕組んで夜の往診に使っていた。硝子を張った箱にガス燈を入れ、筒井医院や鴨島警察官駐在所の門燈にも使っていた。

### 4、電 燈

大正初め頃、徳島には電燈がつき、その明るさと便利さに驚いたりあこがれたりした。

大正七年になって、徳水電気株式会社によって鴨島にも電燈がついた。電燈が家についたのを見て、

人々は思わず万歳を叫んで喜んだ。鴨島には徳水鴨島出張所が置かれ、配線の管理や電球の供給に当たった。電燈がついた家々では、たいてい十燭光をつけ、三十燭光以上を使う家は少なかった。五燭光は便所だけつけられた。

筒井製糸や高知製糸の工場では、多くの電燈をつけ、夜は不夜城のように感じた。また、門燈をつける家も出て来た。

電球も徳水出張所、ひょうたんや、油屋で売られるようになった。

電気会社は、初めは徳水であったが、三重電気、東邦電力と変り、昭和十七年には四国配電となり、昭和二十六年から四国電力となった。

## 第二節 燃料の歴史

### 1、薪の時代

昔は燃料といえは薪にきまっていた。昭和二十五年頃まで、鴨島では大人も子供も暇があると、前山の藤井寺や天神様の山へこくばかきや小木取りに行った。時には山頂を越えて、名西郡の阿川の山まで

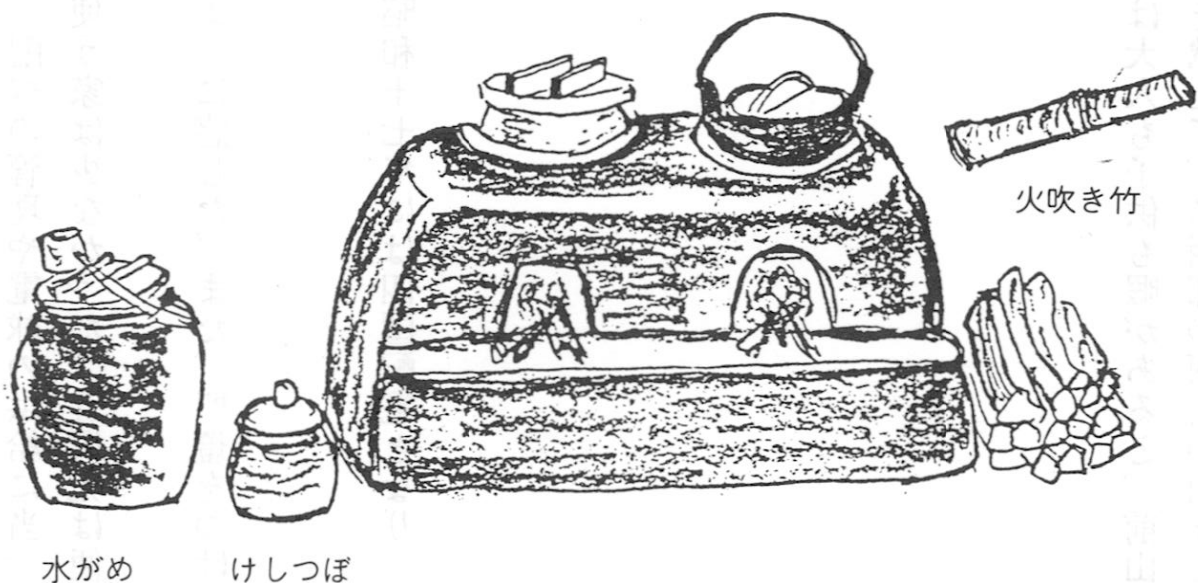
行って、切り捨ててある杉の大枝を縄で引張って帰ったこともある。  
小木採りは、山に捨ててある木の枝を集めて、束ねて背負って帰  
り、こくば搔き（割竹の先を曲げたものを竹の柄に取り付けた熊手  
のようなもの）で、松の落ち葉を搔き集め、縄で箱形に束ね、これ  
も背負って家へ運んだ。

薪は自家で集めたものだけでは足りないので、山の人から松や櫟  
の幹を割った割木を買った。山の人は割木の束を木棒の両方に結び  
つけて担いだり、馬の背に乘せたりして運んで来た。

薪はくどにかけた鍋、釜の下から焚いて湯沸しや食物の煮炊きに  
使ったが、蚕豆や大豆を煎る時は、土製の浅くて広い炮烙の下から  
薪を焚いた。

風呂は、五右衛門風呂といって、鉄板の上に木槽を取り付けて、  
下から焚くものと、鉄砲風呂といって、風呂槽の中の一部に鉄製の  
筒で、下に焚口、灰落し上に煙の吹抜けにしたものを取り付け、火  
を焚やすと、筒が熱せられて水が熱くなるものもあった。

くどは浅い箱に土を入れて底とし、その上に石や赤土でくどを築  
いた。縁付きの釜をかけるくどは、かけ口をそのままにし、縁のな  
い鍋をかけるかけ口は、針金で締めてあった。味噌豆を煮たり、正  
月の餅搗きの時、せいろをのせる大釜をかける大くどは庭に築いた。  
明治の末頃から川島焼のちんがらくどが使われるようになった。こ



のくどは組立式のもので内側に赤土を塗り、上口を針金で締めた。昭和二十年頃までのくどにはたいいて煙突がなく、薪を焚くと、煙は家の中にこもり、天井も柱も黒く煤すすけたものである。この煙を外へ出すため屋根に煙出しのやぐらを設けたり、くどの横に引戸窓を設けたりした。くどで薪を焚く時、火勢が衰えると竹筒の節かじ一つを残して、小穴をあけた火吹竹を吹いて火勢をあおった。

## 2、石 炭

明治三十一年から石炭を焚く蒸気機関車が徳島鉄道を走るようになり、明治四十三年頃から、佐渡製糸や筒井製糸が石炭を焚いて機械を動かし製糸業を始めた。

鴨島では明治中頃、北八幡に亀屋湯が公衆浴場をはじめ、男湯、女湯、薬湯を設け、大正の末頃まで続き、鴨島の人々から長く親しまれた。この頃は家庭風呂が少なく、多くの人は公衆風呂へ行った。

くどの近くには薪を置いたので、時にはこれに火が移り、火災を起こしたこともある。大正になると、鉄道の駅では石炭を使ったストーブを焚いていた。薪を焚いて炭になったものは、火消壺に貯えておいた。「消し炭すみ」とって大事に使われた。また、灰は作物の肥料に使われた外、灰を水に入れて、灰の溶けこんだ水をあくといつて、洗濯に使った。

### 3、木

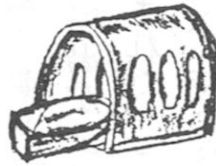
### 炭



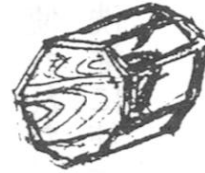
ひばち



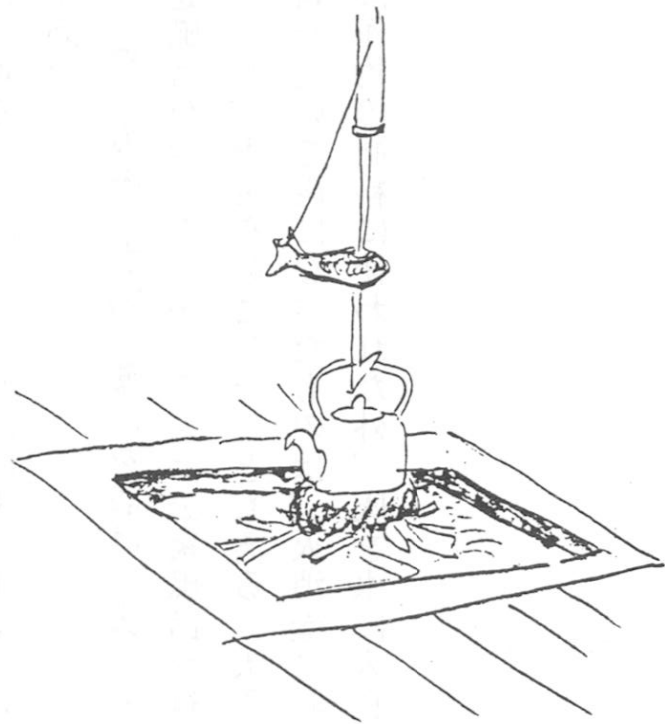
灰いれ



こたつ  
(つじばん)



回転こたつ



い ろ り

薪や割木の消し炭は、火力も強く煙が出ない。そのうえ、持ち運びも便利なので需要が増えてきた。大正年間になると、神山の阿川の人が木を炭まで蒸し焼きにした木炭を、鴨島へ売りに来るようになった。後にはひょうたんや、くつわで売るようになった。木炭には松を焼いた早炭と櫟や樺くぬぎを焼いた堅炭かたずみがあった。早炭は、火つきは早いが火力は弱く、炭が長もちしなかったが鍛冶に適していた。堅炭は堅くて火つきはおそいが火力は強く、炭は長持ちした。火のついた炭を火鉢の灰の中に埋めておくと、火が十時間位もつので炬燵たきだこに使うのに適した。炬燵は冬にはなくてはならぬもので、色々あった。つじばんは土製の焼物で上部に空気室があって、その下に木炭の火を埋めた火鉢を入れるようにしたもの、またやぐら炬燵といって木のやぐらの中に火鉢を入れたもの、また、いろりを床下まで掘り込み、その上

にやぐらを置いたものがあつた。

大正年間、鴨島で養蚕が最も盛んであつた頃、養蚕室の中頃に、幅一メートル位で長さは室一杯のいろりをつくり、木炭を十俵位入れて、温度を上げて春蚕や晩秋蚕を飼育したことがあつた。

## 4、煉炭

大正中頃から無煙炭を粉碎して、粘土でかためた煉炭れんたんが使われるようになった。煉炭には、豎形の蜂の巣煉炭と丸い豆炭があつた。煉炭は着火はおそいが火力が強くて、火は二十時間ほど長持ちした。豎形煉炭を使う時は円柱形の煉炭コンロを使った。また、火鉢に入れる時は、皿の横から通気孔の通つた煉炭皿に煉炭を乗せ、灰に埋めて通気孔から煉炭に空気が通うようにして使つた。

着火した豆炭を火鉢に入れ、灰で埋めたものを炬燵こたつに入れると一晩中火持ちした。

養蚕室では木炭の代わりに、大形の煉炭を大形の煉炭コンロに入れていろりにした。しかし、煉炭はガスを多く発生するので、室の空気を入れ替えないと中毒することがあつた。

昭和になると、山の木を乱伐して薪にするのを節約しようとの声が出て、脱穀だつこくの時出来る粃殻しみがらや製材屑くずのおが屑を、粃殻しみがらくどにつめて燃焼することが一部で行われた。

## 5、石 油

昭和十年頃から、石油コンロが出て、炊事用に使われたが普及しなかった。その後、電気コンロも出たが、器具の構造に欠点があつて一般化しなかった。

第二次世界大戦中は、燃料が不自由であつたので、農家も町人も前山へ薪採りに行った。また、バスやトラックの燃料に木炭や割木を使った。

現在は燃料として薪や割木、木炭、煉炭を使うことは少なくなり、燃料器具も旧式のくどや七輪、コンロ、炬燵を使うことは殆んどなくなり、LPガス、電気、石油、太陽熱を使う種々の便利で効率のよい器具が普及している。

## 第三節 乗物の変遷

### 1、川 舟 交 通

明治三十二年の徳島―鴨島間の鉄道が開通するまで、江川、飯尾川は輸送の大動脈であつた。特に藩

政時代の藍玉をはじめとするほとんどの物資は、川舟に積み込まれた。従って、吉野川本流では上流からの航行する舟も多く、常に帆かけ舟を見ることができた。

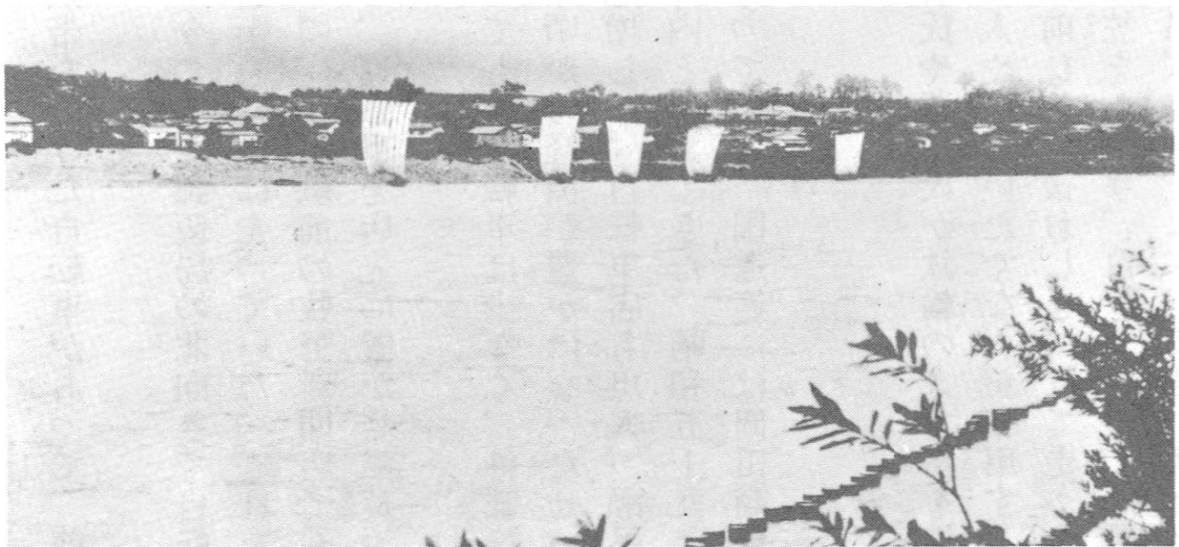
鴨島からは藍玉を積んだ舟は第十にでて、三ツ合から今切川に入り、船場へ出るのがほとんどであったが、旧吉野川に出て、撫養に着く舟もあった。帰りには肥料（ニシンカス）、塩、イリコ、大谷焼のカメなどを積んで帰った。江川（鴨島公園の東、北）にも波止、浜と呼ばれる場所があり、今も舟の停泊するところだった石積みが残っている。

藍商は専属の舟を持っており、帆には屋号や商号の紋をかかげていた。川舟にはヒラダ（高瀬舟）とエンカンと呼ばれるもので陸上の馬車に比べて、数十倍の輸送力があつた。大正にはいつても、時々帆かけ舟を見かけることができたが、今は川底も浅く、橋がたくさんかけられたので姿を消してしまった。

## 2、陸上交通

### (1) 自 転 車

明治中期までは、乗物といえば馬に乘ることで、時には牛に乘

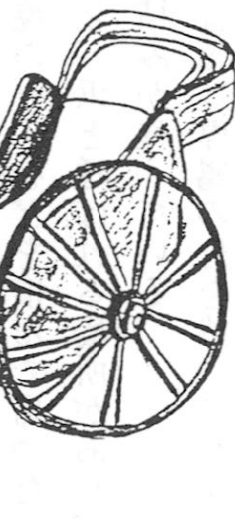


川舟の帆反八

って嫁入りしたとの話もある。

明治の末頃、上下島の舎（やまこ）には大前輪、小後輪の両輪に鉄帯をつけた自転車があって、前輪につけたペダルをふんで走っているのを見たことがある。

大正になって、ゴム輪の自転車が始め、鴨島の瀬尾和三郎氏は、今の本町郵便局の北向きで自転車屋を開いていた。氏は赤白だんだらに染めたシャツを着て、鴨島商店街を軽快に走っていた。これを見た人々は、二輪で走っていて倒れないのは不思議だと感心した。この頃、鴨島駅前の牧野新聞店でも自転車を備えていた。牧野新聞店の前には、通学生が駅まで乗りつけて、自転車を店先に置かせて貰っていた。



人 力 車

大正五年頃から自転車を備える人がポツポツでてきた。昭和になっても、自転車は少なく、終戦後からふえだしたが、昭和三十年頃から経済が豊かになったせいもあって、自転車をもつ人が急増した。自転車店も川人、瀬尾、木村、米田、筒井、河野、井内とふえてきた。昭和五十九年の今日では各戸に二、三台もっている。国道筋には岡田商會が自転車の卸業を営んでいる。

## (2) 人力車営業

明治二十年頃、鴨島で三倉氏や蔭山氏が鉄輪の人力車を備えて営業を始めたので、急用の人や、ぜいたくな人が利用するようになった。特に忙しい人は前ひき、後おしをつけて走った。

この頃のひき手は黒の饅頭笠をかぶり、白シャツの上に黒のどんぶりをつけ、黒の絆天はんてんに黒ズボンをはき、草鞋わらじがけという

出立ちで「はいよ、はいよ」と勢いのよいかけ声で、勇ましく、石ころ道をカラカラと輪音をたてながら走った。

明治三十二年、徳島から鴨島まで鉄道が通じると、三倉氏は人力車数台を鴨島駅前に常駐させて客を乗せたが、昭和初め頃、ハイヤーが営業を始めるようになって、人力車の利用が次第に少なくなった。大正中頃から人力車はゴム輪になり近代化した。

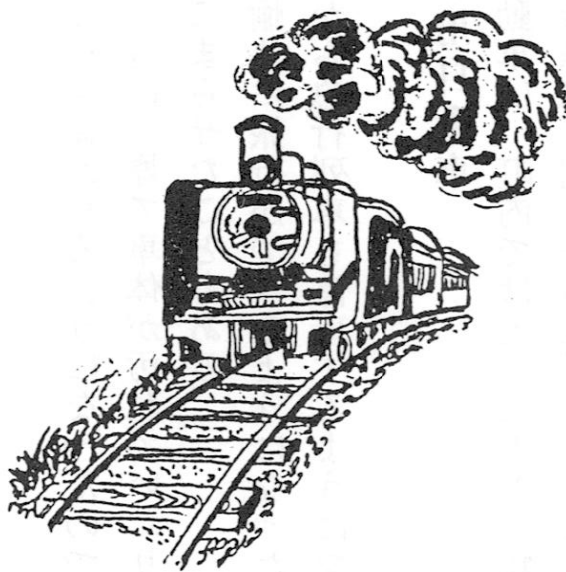
自家に人力車を備えたのは、鴨島の筒井医師や西麻植の上野医師で、ひき手を常備やといし、往診に乘用していた。人力車が少なくなった昭和二十五年頃、鴨島の新居医師は人力車と車夫を常備し、往診に使っていたが、昭和三十五年、氏が亡くなると人力車は鴨島から影を消した。

### (3) 鉄道交通のはじまり

明治三十二年二月十六日、徳島鉄道株式会社の鉄道が徳島から鴨島まで開通したので、徳島への通学、通勤、買物、商用等は画期的に便利になった。明治三十三年には川田村舟戸まで延長され県西への交通が便利になった。

この鉄道は明治四十一年には国鉄となり、大正二年には小松島まで延長され、小松島港から乗船し、大阪、東京方面への交通が便利になった。大正三年には川田より池田まで延長され、県西へはもとより、高松、松山、高知方面への交通も便利になった。この頃から池田と高松、高知へのバスも開かれた。

汽車は石炭を焚く蒸気機関車で牽引したので、黒煙をもう



蒸気機関車



自家用自動車

もうとはいって、ポツポツシユツシユツと力強く威勢よく走った。昭和二十五年天皇が四国巡幸の途、鴨島に下車されたのは記憶に残っている。

昭和四十三年頃から重油を焚くディーゼル機関車やディーゼルカーが使われるようになったので、煙を出さず、ゴーツと軽快に走るようになった。蒸気機関車を使った時は、煙で車体が汚れていたり、汽車の窓を開けると、石炭殻の粉が目に入ることもある。

ディーゼルカーになると、窓を開けて車外の風景を見ながら、愉快に旅行ができるようになった。

鴨島駅では初めから普通列車は停車しているが、昭和四十年頃から急行列車も停車するようになったので、汽車による旅行は便利になった。

#### (4) 自家用自動車

乗用自動車は、町内では大正二年頃、知恵島四ツ谷の製糸家片岡氏が自家用に備えたのが最初である。鴨島では大正十年頃、筒井製糸や片倉製糸、中西の松島氏が備えたのがはじめであるといわれている。

その後、乗用車はふえなくて、昭和三十三年頃は鴨島では四台であった。

昭和三十七年七月三十一日、鴨島の天島に鴨島自動車学校が開設されると、鴨島の人は運転免許をとるのが便利になったので、若い男女は競って免許をとって車をもつようになった。

昭和四十年頃からは、経済の急速な発展もあって、乗用車は殆んど各戸に備えられ、通勤、買物、旅行等に足として、下駄げだのように使われるようになった。

(5) 乗りあいバス

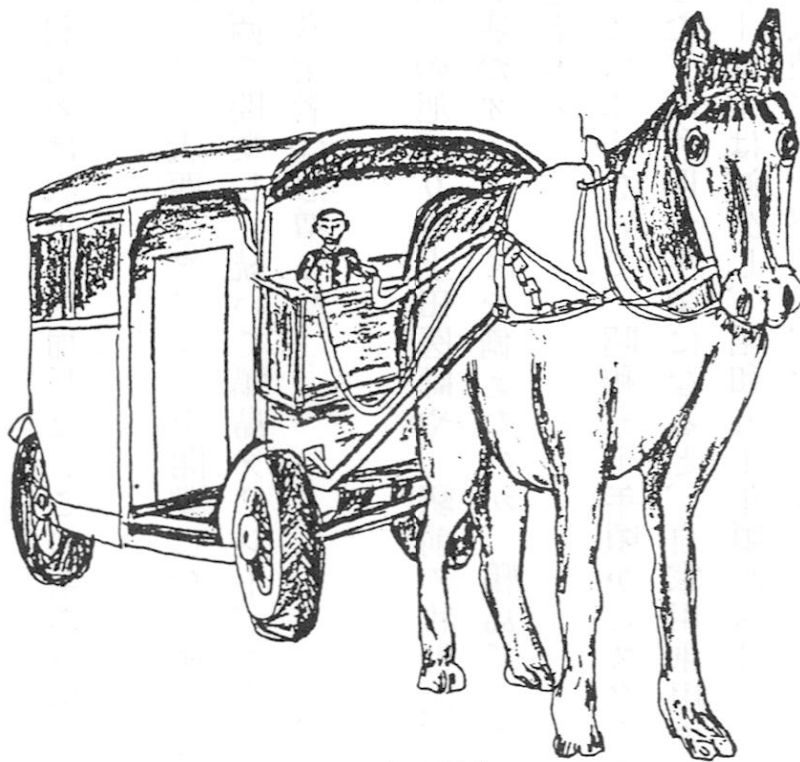
大正の末から昭和の初めにかけて、県下にバスが走り始めたが、昭和の初め頃、鴨島にも徳バスが通るようになった。昭和二十八年、中央橋が開通すると、徳バスや国鉄バスが鴨島から北地に通じるようになり、北岸経由で鳴門行、徳島行、かじや原行、三本松行、界目行、穴吹行が運行され、北地との交通は便利になった。

昭和三十二年には、徳島、池田間の徳バスが鴨島にも乗り入れるようになり、東西の交通は便利になった。バスは戦前はフォード製を使い、戦中は木炭や薪を焚いてガスを燃料の代用にした。戦後は次第に国産車に変り、昭和三十年頃には全部国産車を使うようになった。

昭和二十八年には鴨島の北西に徳バス営業所が置かれたが、国道一九二号線が開通して（昭和四十三年頃）、上下島の国道筋に移った。鴨島に営業所が置かれたので、バスが鴨島に発着し、バスの利用は一層便利になった。

(6) ハイヤー・タクシー

昭和三年頃、鴨島郵便局前の瀬尾和三郎氏が乗用車一台を備えてハイヤーを開業し、昭和六年には鴨島駅前の牧野氏が乗用車二台を備えてハイヤーを開業、続いて豊



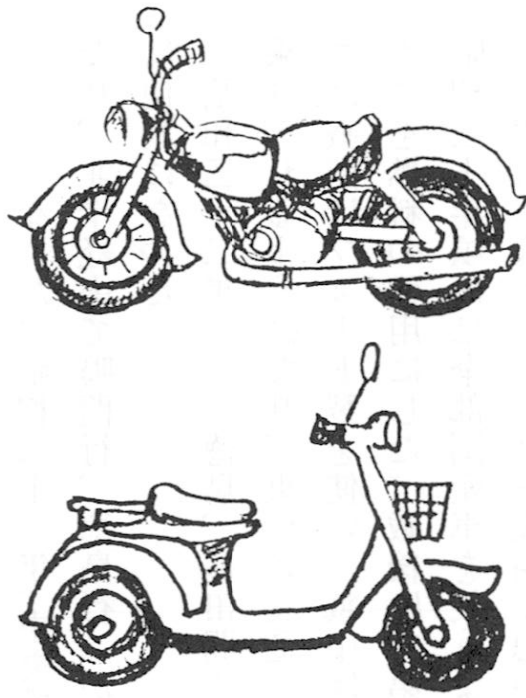
のりあい馬車

田氏も乗用車一台で、大西で開業した。

ハイヤーが開業されると、その便利さがわかってきて、利用者は次第に増加した。この頃の乗用車はシボレーが使われて、国産車は鴨島にはなかった。

終戦後、昭和二十五年頃、植村氏が三輪自動車を乗用にして、大西でタクシーを開業した。後に鴨島タクシーとなった。昭和三十年には麻植タクシーが鴨島駅西で開業し、続いて鴨島タクシー、さくらタクシーが開業したが、時代の多様化とスピード化によって利用者は急増した。

(7) オートバイ・スクーター



昭和初め頃、鴨島の旭通りの上田医師や、駅前牧野氏、銀座通りの美馬百貨店がオートバイを備えたのが、鴨島でのオートバイの初めと思われる。

その後オートバイはふえないで、昭和三十年頃からスクーターと共にふえだした。昭和四十年頃になると、自家用乗用車がふえたので、スクーターは減少し、昭和五十年頃からスピードを好む青年が乗る大型オートバイや、女性が軽快に乗るミニバイクがふえてきた。昭和五十九年の現在では、一人乗りのミニカーも出現した。

各戸に自転車、オートバイ、自家用車が備えられている。

自動車店も国道西からトヨタ自動車、秋山自動車、瀬尾自動車、中央橋通りには北から川真田自動車、鴨島ダイハツ、三橋自動車等が営業している。

### 3、貨物輸送

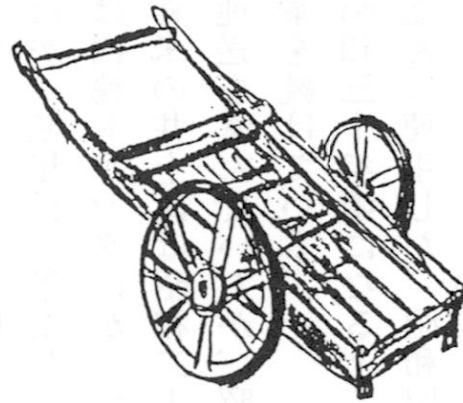
陸上運搬は藩政時代から、猫車や荷車が使われたが、明治中頃から鉄輪の牛車や馬車が使われ、昭和になるとゴム輪が使われるようになった。

上下島の岡田民蔵さんは、明治中頃から末期まで牛車を牛にひかせ、石ころをことごとと徳島まで荷物を運んだ。荷車や牛馬車を備えていた人は極めて少なく、運搬業者が鴨島―徳島間の貨物運搬に使う程度であった。明治の末から大正中頃にかけて、持部鉦山や広石鉦山の銅鉦を、森藤三谷までワイヤーロープでおろしたものを、鴨島駅まで運ぶのに牛馬車が使われた。

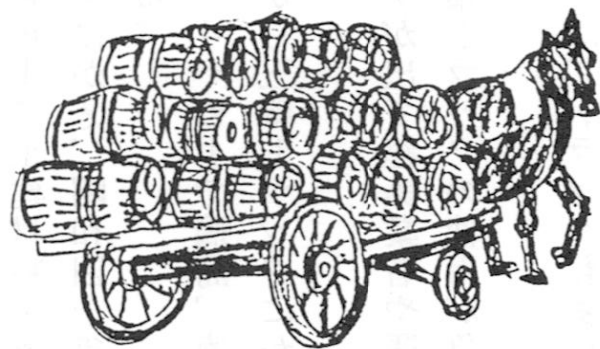
明治三十二年、徳島鉄道が開通すると、貨物車で運送するようになり、大量の貨物が迅速しんそくに遠距離まで搬入できるようになった。

昭和五十五年頃から国鉄の経費節約けいひせつやくのため、鴨島駅では貨物取扱いを止めたので不便になったが、大型トラックによる運送は遠距離まで盛んに行われている。昭和五十八年頃から全国組織のトラックによる宅配が営業されるようになり、小荷物でも、発送者宅から受取人宅まで運ばれる時代になった。

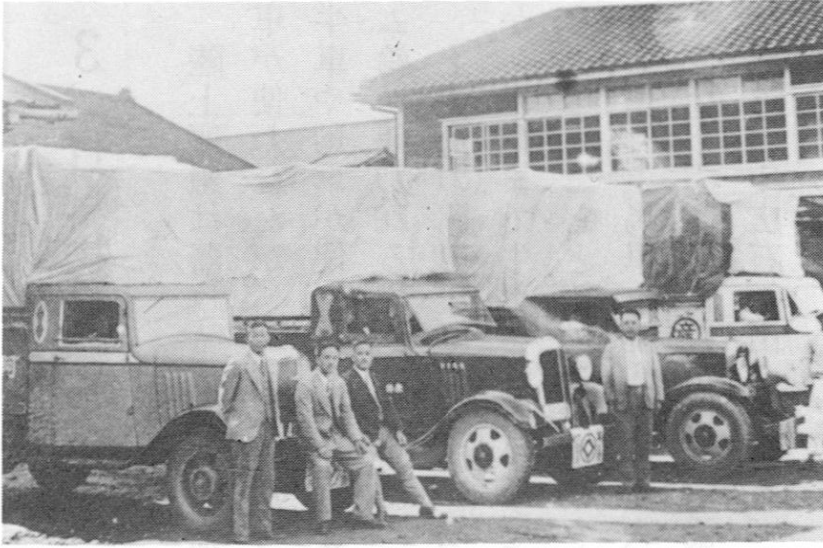
昭和の初め頃、飯尾の医師大久保秀雄氏が阿波縦貫自動車会社を設立して、トラック三台で鴨島―川



大八車(荷車)



馬車



筒井製糸の貨物自動車

島間をトラック輸送した。続いて鴨島から市場町、阿波町を経て穴吹まで運行を延長した。

昭和五年には、東本町の井上勝一氏がトラック三台を備え、運送業を始めた。主として、ひょうたん屋の荷物を鴨島―徳島間を運んでいたが、高知や牟岐の遠方まで運行した。

昭和十五年、太平洋戦争が始まる前年から燃料節約のため、企業整備が行われ、鴨島の井上トラック、飯尾の工藤トラック、牛島の大谷トラックは統制され、鴨島陸運だけが残った。戦争中は木炭や薪木を焚いてガソリンの代用とした。

昭和二十五年頃からリヤカーや一輪車がでて、各戸で使うようになると共に、トラックも増加したので荷車や馬車は次第に使われなくなった。

本郷の藤井氏は、昭和二十三年頃から馬車で土建材料を運んでいたが、昭和三十年頃から三輪トラックにかえ、昭和四十年頃からは四輪トラックにかえて営業している。

喜来の井上氏は昭和二十五年頃から、リヤカーで鴨島、徳島間の運送を営んでいたが、昭和三十年頃から三輪トラックにかえて営業を続けている。

昭和三十年頃になると、三輪トラックが出て建築業者や運送業が盛んに使用した。昭和四十年から四輪トラックの使用が急増し、三輪トラックは姿を消した。

昭和五十九年の現在には乗用車は各戸に、トラックも多くの事業所で備えられるようになり、車庫も自家用や貸用のものが設け

られ、駐車場も自家用、貸用、共同のものが各所に設けられている。

道路も自動車を通れるように拡張舗装が行われ、新道も開かれて自動車はどこにでも走行できるようになった。

現在走行している自動車は、トヨタ、日産、マツダ、ホンダ等の国産車が殆んどで、戦中までフォードやシボレー等外国車が使われていた時代とは全く変わっている。

自動車は国道や商店街ばかりでなく、裏町や田舎道、山道までも走行している。

道路の要所では、前には警官が手振りで交通整理をしていたが、今では自動の信号機や標識、ミラーが設備されて交通安全を計っている。だが、交通事故が次々発生する。

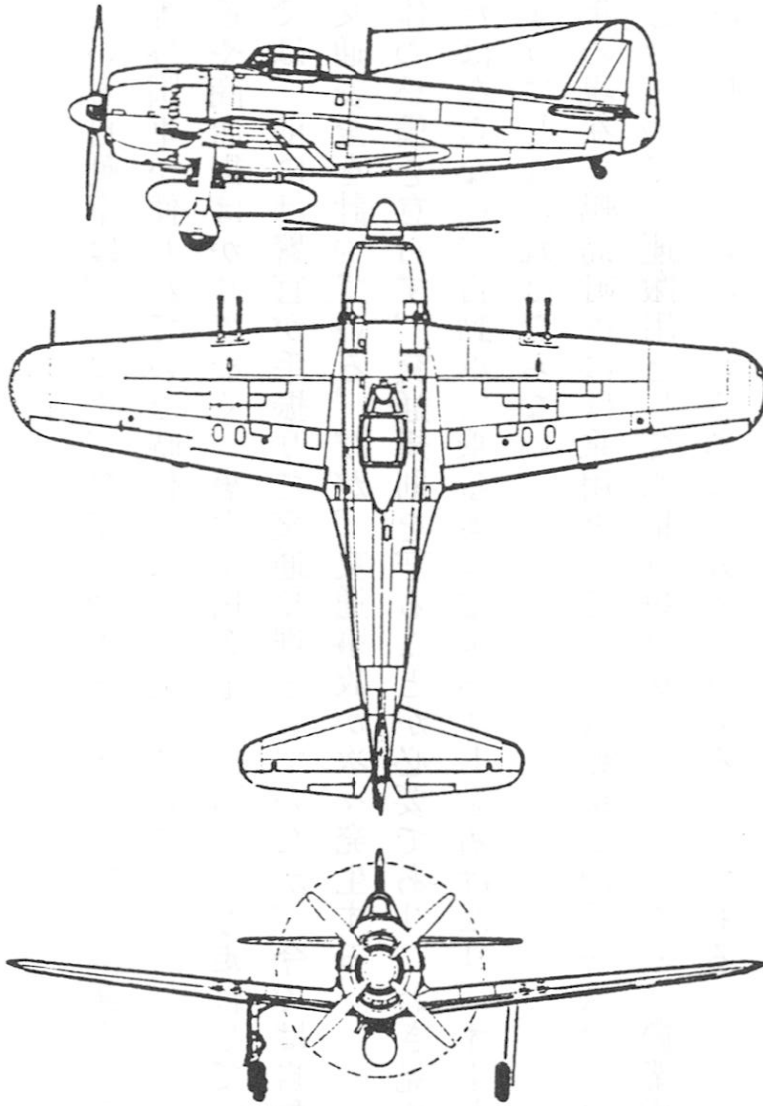
運転者は車体の整備を怠らず、交通規則を守ることが必要であり、わき見や居眠り、飲酒をしないよう心がけなければならない。自動車に乗る者は安全ベルトを着けたり、オートバイに乗る者はヘルメットを着色するようにしなければならない。

昭和五十九年の現在、鴨島町内には乗用として原付自転車が一六四台、自動二輪が一六四台、軽四自動車が八九〇台あって、運搬用として四輪貨物車が二二〇一台ある。農業作業車は二四二台が使われている。この内、鴨島で使われているのは三分の一位あるようである。

#### 4、その他

鴨島には飛行機も飛行場もないが、戦争中筒井製糸では飛行機の製作にあたっていたことがある。最近になって、田中首相がヘリコプターで体練場に着陸したことはあるが、松茂の徳島空港に行き、大阪、

東京に飛び、日帰りで用務を果たして帰ることもできるようになった。  
最近では、国際化時代となり、海外旅行に出かける人も多い。鴨島兄弟教会では、毎年のように、外国から訪れる親善団があり、英語を話せる人も急増している。



紫電改 図